

平安京右京四条二坊四町跡・壬生遺跡

2013年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京四条二坊四町跡・壬生遺跡

2013年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う平安京跡・壬生遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

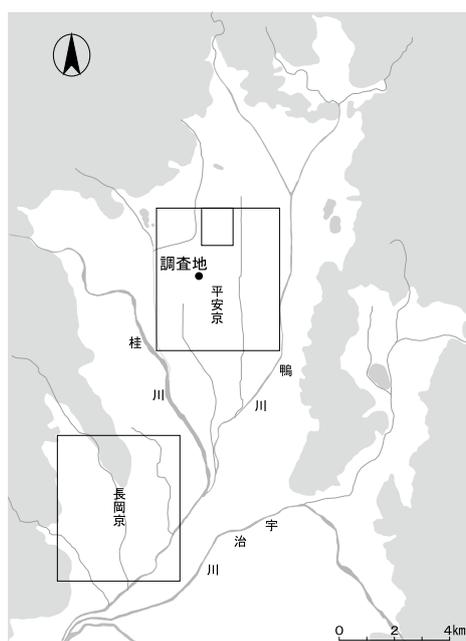
平成25年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・壬生遺跡（文化財保護課番号 12 H 231）
- 2 調査所在地 京都市中京区壬生東淵田町22番地
- 3 委 託 者 株式会社NTTファシリティーズ関西事業本部 建築事業部長 野田一路
- 4 調査期間 2013年8月5日～2013年9月18日
- 5 調査面積 390㎡
- 6 調査担当者 金島恵一・小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」・「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 金島恵一・小檜山一良
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構	6
4. 遺 物	18
(1) 遺物の概要	18
(2) 土器類	18
(3) 瓦類	25
(4) 金属製品	27
5. ま と め	29

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（東から）
		2	第2面全景（東から）
図版2	遺構	1	建物2（南東から）
		2	建物1（東から）
		3	井戸157（北西から）
		4	井戸157断割り（北から）
図版3	遺物	出土土器	
図版4	遺物	出土軒瓦	

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景（東から）	2
図3	作業風景（東から）	2

図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	周辺調査位置図（1：3,000）	4
図6	北壁断面図1（1：50）	7
図7	北壁断面図2（1：50）	8
図8	西壁断面図（1：50）	9
図9	調査区平面図（1：200）	10
図10	建物1・2実測図（1：50）	12
図11	柵1～3実測図（1：50）	13
図12	井戸157実測図（1：50）	14
図13	柱穴95実測図（1：20）	15
図14	土坑40・60・61・87・122・166断面図（1：50）	16
図15	土坑・溝・井戸・その他の遺構出土土器実測図（1：4）	19
図16	整地層出土土器実測図（1：4）	22
図17	墨書土器	24
図18	第1面検出中出土土器実測図（1：4）	24
図19	輸入磁器実測図（1：4）	25
図20	軒瓦拓影・実測図（1：4）	26
図21	金属製品実測図（1：2）	28
図22	金属製品	28
図23	右京四条二坊四町内の遺構配置図（1：1,000）	29

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	18

付 表 目 次

付表1	土器類一覧表	31
付表2	軒瓦一覧表	34
付表3	金属製品一覧表	34

平安京右京四條二坊四町跡・壬生遺跡

1. 調査経過

この発掘調査は、京都市中京区壬生東淵田町22番地NTT敷地内において計画された建物新築工事に伴うものである。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の事前の試掘調査結果により、平安時代以降の遺構密度は低く、平安時代の整地層が厚く堆積していたことが判明した。文化財保護課の指導により、平安時代の遺構の調査および整地層に含まれる遺物の採取に主力を置くこととした。調査は、株式会社NTTファシリティーズ関西事業本部から委託を受け、財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013年10月1日から公益財団法人に移行。）が発掘調査を行うこととなった。

既存建物の解体と発掘調査を並行して実施することとなったため、発掘調査範囲と解体工事範囲を明確に分け、安全を確保した上で発掘調査を行うこととした。

今回の調査区はNTT敷地の北西部分にあたる。東西46m、南北8m、調査区西端で南側に南北4m・東西5.5m張り出す形で調査区を設定した。調査面積は390㎡であった。

調査区一帯は元テニスコートであったようで、盛土が厚く堆積し、その下層には近代から中世の



図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（東から）

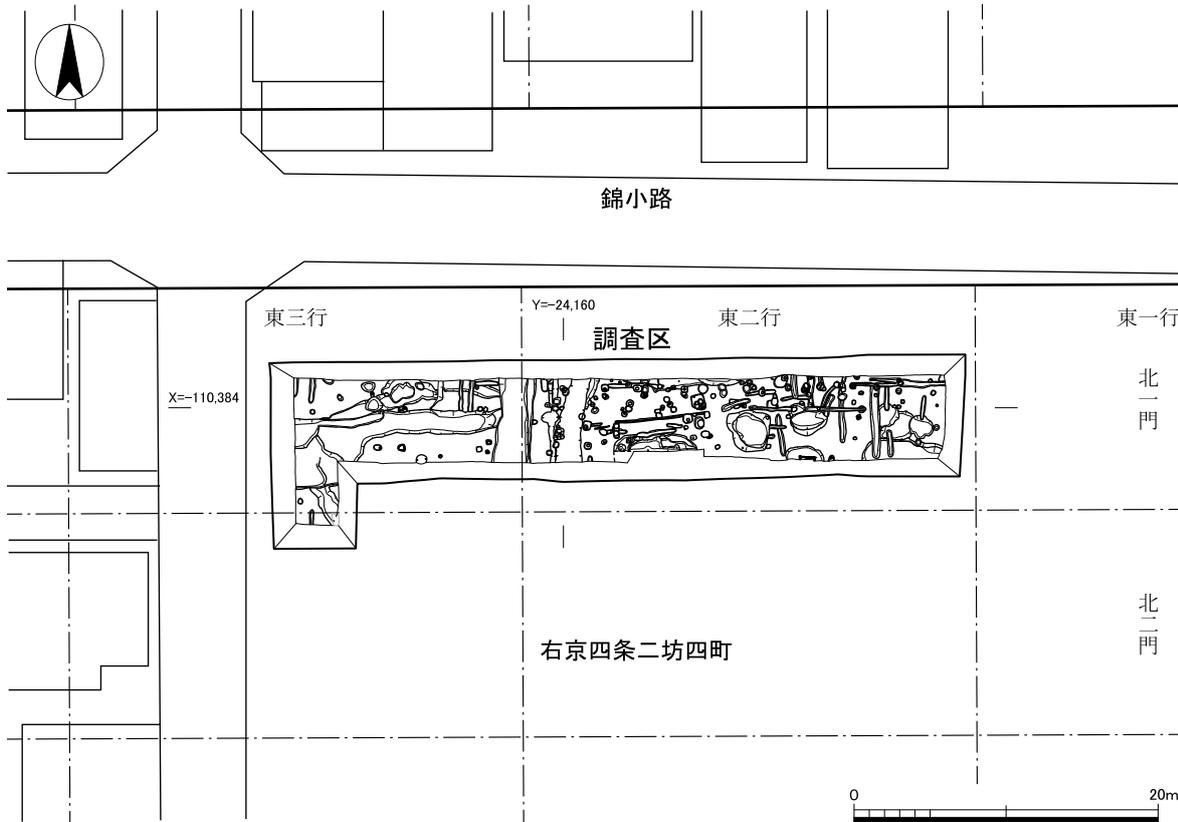


図4 調査区配置図（1：500）

耕作土層があったが、平安時代の整地層の上面まで機械掘削により土層を除去し、以下は人力での作業を行った。

平安時代の整地層上面を第1面とし、この面で室町時代の耕作溝を検出した。平安時代の整地層は厚さが0.2～0.5mあり、調査区全域にわたり堆積し、多くの遺物が含まれていたため遺物採取に努めた。この整地層の下層は地山で、この上面を第2面とした。第1・2面で実測図と写真撮影による記録を取った。その後、部分的に断割りを行い下層に遺構・遺物がないことを確認し、埋め戻しを行い、調査を終了した。

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と歴史的環境

調査地は平安京右京四条二坊四町の北端中央部、東二・三行、北一門にあたる。四町は錦小路が北接し、西大宮大路が東接する宅地であるが、住居者は不明である。『拾芥抄』西京図によると、小泉庄の御厩から発展した荘園の一部にあたる。また、この下層は弥生時代から古墳時代の遺物が出土する壬生遺跡にもあたる。

調査地の東側にあたる右京四条一坊十一・十二町は、醍醐天皇第十皇子である源高明(914～982年)の西宮、西宮殿とも呼ばれた2町分を占有する第宅があったとされる場所である。源高明はこの第宅の通り名を冠して「西宮記」として宮廷儀式書を著していることは史実にも明るい。『今昔物語集』二六ノ一三によると、十一町はもともと湿地で人が住めなかった土地であったが「上綾ノ主」といわれた兵衛佐某が安価で購入し、難波の葦を敷いて土を盛り、家を建てられるようにした。その後、十二町に住んでいた源定が買い取って2町分の敷地としたとされる。この後、源高明に伝領されている。

また、調査地の西側にあたる右京四条二坊十一町から十四町には淳和天皇(786～840年)が皇太子時代から御所とし、4町分の敷地を有していた淳和院¹⁾がある。

(2) 既往の調査(図5、表1)

周辺における主な既往調査は、以下のとおりである。

調査1は、同四町南端東部分と西大宮大路にあたる。1975年の現京都市身体障害者リハビリテーションセンター建設に伴う調査で、西大宮大路と2間×3間の建物・柵・ピット群を検出した。西大宮大路の路面では車の轍や牛の蹄跡を検出した。西側溝からは9～10世紀の遺物が出土している。遺物は土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦類・石帯・墨書土器・木簡・土馬などが出土した。しかし、建物を検出した範囲は西大宮大路に面した東一行分のみで、それより西側の東二行では湿地状を呈していた。

調査2・調査3は、右京五条二坊一町にあたる。1978年と1980年に実施した京都市立朱雀第七小学校内での校舎増改築工事に伴う調査で、平安時代の掘立柱建物・溝・井戸などを検出している。建物は一町西端部で南北棟が2棟並ぶ配置となっていた。遺物は土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬・瓦類などが出土している。また、縄文時代草創期と考えられる有舌尖頭器も出土している。

調査4は右京四条二坊六町にあたる。1987年にマンション建設に伴う調査で、平安時代前期の西鞠負小路路面・西側溝・建物・井戸などを検出している。建物の位置からすると1/4町規模を有する宅地とみられる。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・石帯・硯・土馬・銭貨などが出土している。特に、緑釉陶器では香炉蓋・唾壺、灰釉陶器では双耳

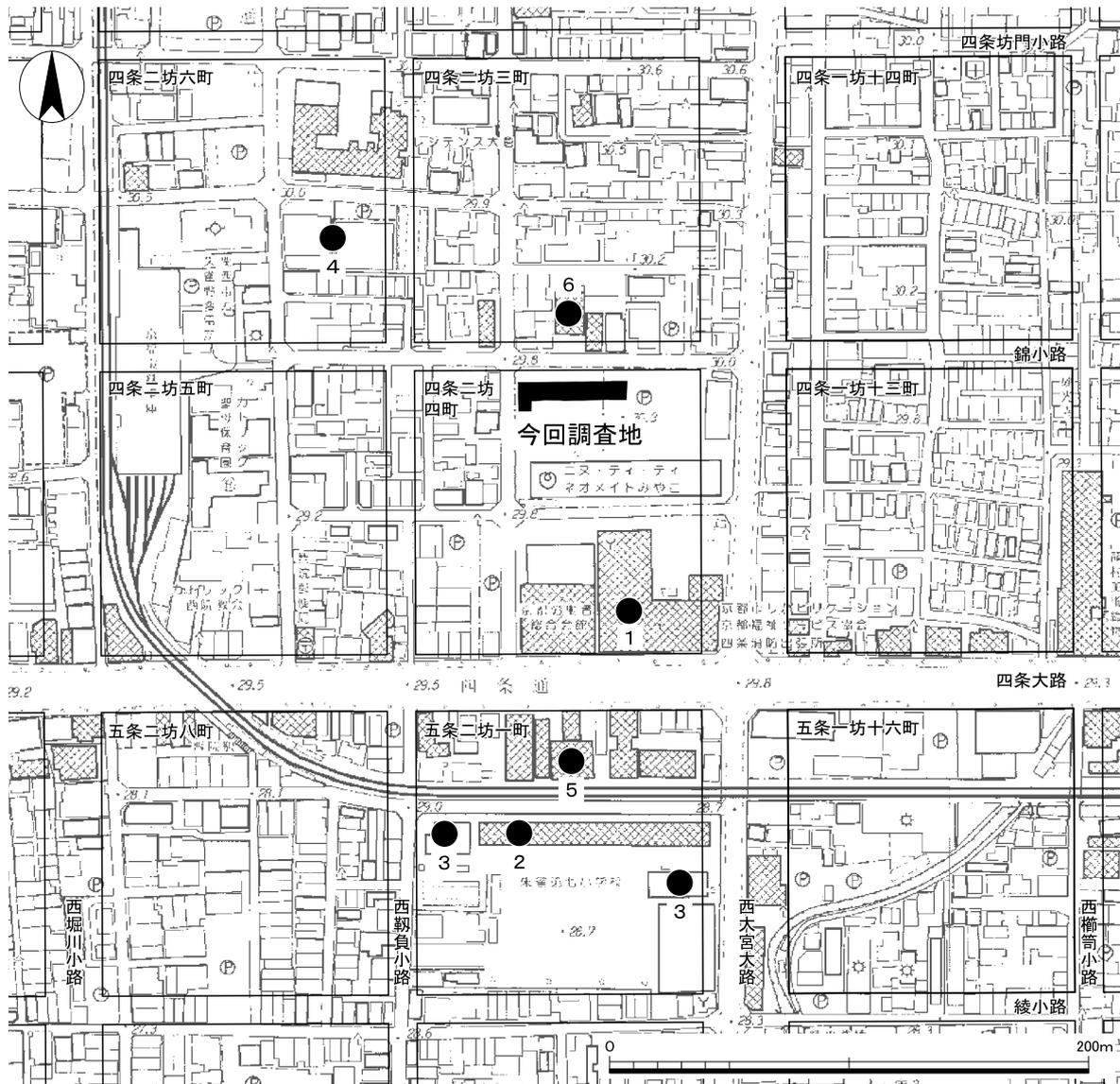


図5 周辺調査位置図 (1 : 3,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法	調査期間	遺構	遺物	文献
1	平安京右京 四条二坊四町	発掘	1975. 7 ~10	平安時代の西大宮大路路面、側溝、 建物跡	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶 器、輸入陶磁器、瓦、石帯、墨書土 器、木簡、土馬	註2
2	平安京右京 五条二坊一町	発掘	1978. 7. 17 ~8. 31	平安時代の掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶 器、土馬、瓦	註3
3	平安京右京 五条二坊一町	発掘	1980. 5. 13 ~6. 25	平安時代の掘立柱建物、柵、井戸	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶 器、土馬、瓦	註4
4	平安京右京 四条二坊六町	発掘	1988. 1. 18 ~5. 20	平安時代前期の西堀負小路路面、側 溝、建物、井戸、室町時代の路面	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶 器、輸入陶磁器、石帯、硯、土馬、 銭	註5
5	平安京右京 四条二坊五町	試掘	1984. 7. 13、 8. 29	GL-1. 3mで平安時代の包含層	土師器、須恵器、施釉陶器	註6
6	平安京右京 四条二坊三町	立会	1997. 1. 7 ~1. 13	幅2. 2m以上の南北溝東肩		註7

壺・獣脚付盤などの高級品が出土している。

調査5は試掘調査である。右京四条二坊五町にあたり、地表下-1.3mで平安時代の包含層を検出している。

調査6は立会調査である。右京四条二坊三町にあたり、今回の調査地の北側に位置し、南北溝東肩を幅2.2m以上検出している。後述する溝28の延長であろうと思われる。

註

- 1) 古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店 1994年
- 2) 吉川義彦「平安京・朱雀院跡と西宮領跡」『仏教芸術』115 毎日新聞社 1977年
「西宮領跡と西大宮大路跡（平安京右京四条二坊）」『平安京跡発掘資料選』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年 主要遺構概説P3
- 3) 「平安京右京五条二坊一町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 4) 「平安京右京五条二坊一町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 5) 平方幸雄「平安京右京四条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年 図版8 - HR56
- 7) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年 図版11 - HR388

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6～8)

調査区の層序は、地表から0.9mまでが現代盛土である。第1層は近・現代の耕作土層、第2・3層は近世の耕作土層、第4層は室町時代の遺物を少量含む厚さ0.2～0.4mの耕作土層である。その下層が第16・23層とした厚さ0.2～0.5mの平安時代前期から中期の遺物を多く含む黒褐色砂泥および黒褐色粘質土の整地層である。この第16層の上面で室町時代の耕作溝や土坑を検出した(第1面)。第16・23層の整地層の下は灰色シルト層(第55～57層)を主体とする地山層が存在する。平安時代前期の建物・柵・柱穴・井戸・土坑・溝などの遺構群は、この地山層(第2面)に切り込んで成立している。

(2) 遺構

1) 室町時代の遺構 第1面 (図9、図版1-1)

溝と土坑を検出した。東西方向の溝を4条、南北方向の溝を14条検出した。南北溝はほとんどが南北に調査区外にのびる。上面が削平されているために遺構の遺存状態は良くない。溝3以外は耕作に関連する溝と考えられる。土坑は3基検出した。以下、東西および南北溝の代表的なもの土坑について記述する。

東西方向小溝群 調査区の西部に分布する溝6・7など4条の東西溝である。東西3.1～8.5m、幅0.25～0.5m、深さ0.05～0.08mである。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。上面は削平されていると思われる。埋土は灰黄褐色砂泥である。

南北方向小溝群 調査区全域に分布する溝12・19など12条の南北溝である。南北2.8～6.6m、幅0.4～0.6m、深さ0.25～0.35mある。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。埋土は黒色砂泥や黄灰色砂泥である。溝19からは平安時代前期の輸入白磁椀(図19-95)が出土しているが、この遺構が平安時代の整地層を基盤としているためである。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期 ～中期	建物1・2 柵1・2*・3* 柱穴95・129* ピット22*・31*・50*・98*・182* 溝24・25・28・34*・35・38*・69・94*・107*・135* 井戸157* 土坑40・60*・61*・96*・122*・166・197* 整地層*	第2面
室町時代	溝3・6・7・12*・19* 土坑1	第1面

(*印は遺物掲載遺構)

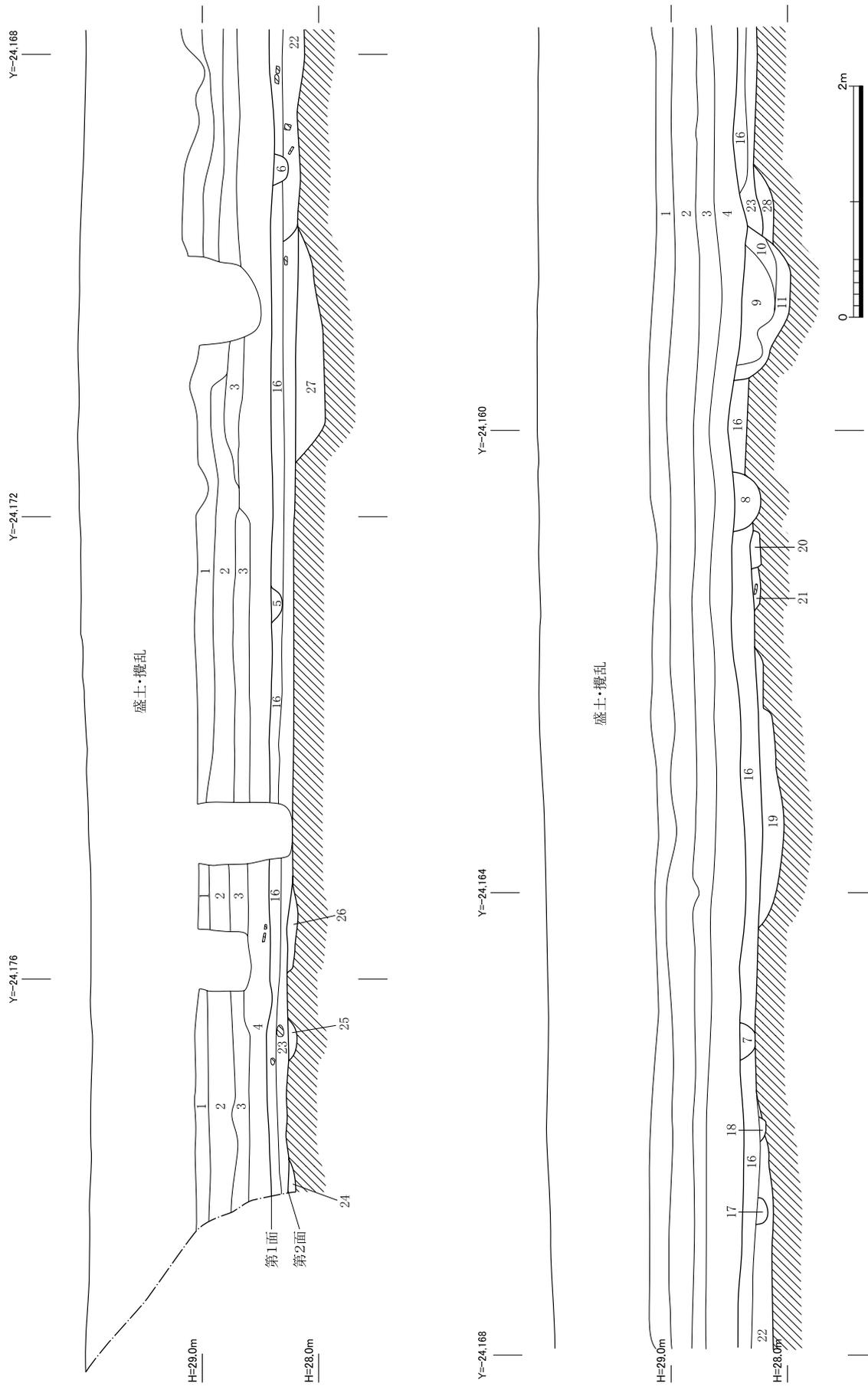


图6 北壁断面图1 (1 : 50)

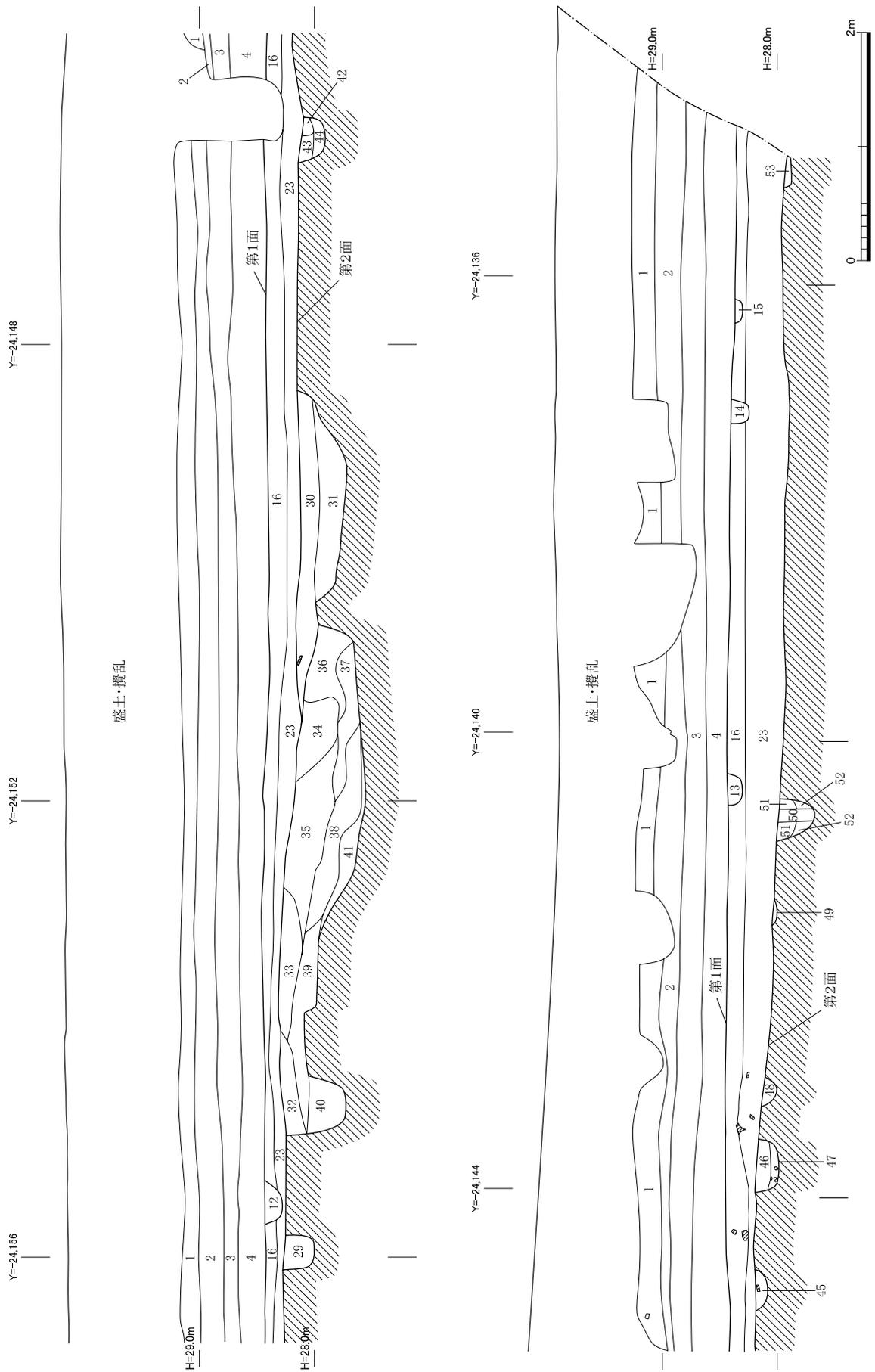


图7 北壁断面图2 (1 : 50)

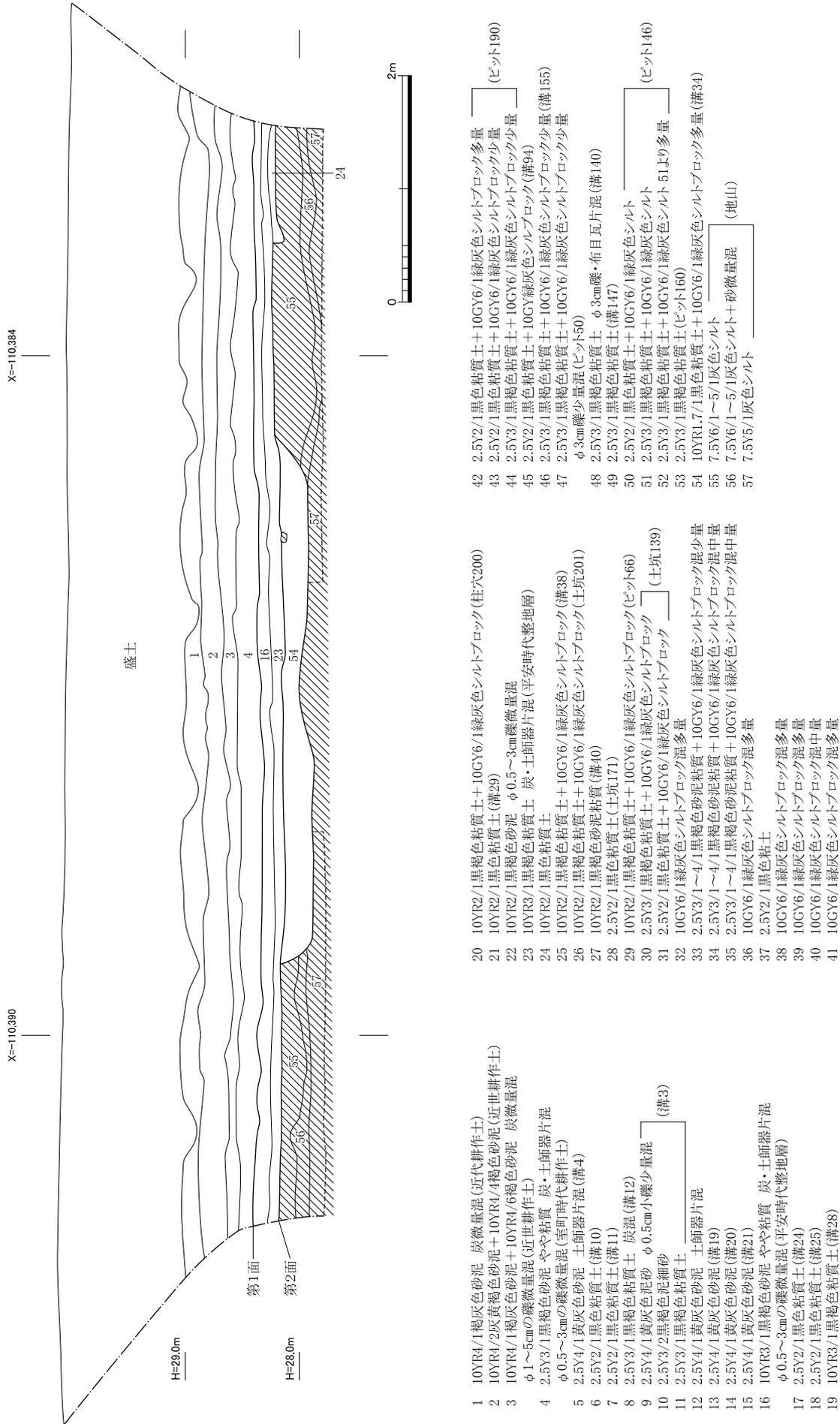


図8 西壁断面図 (1:50)

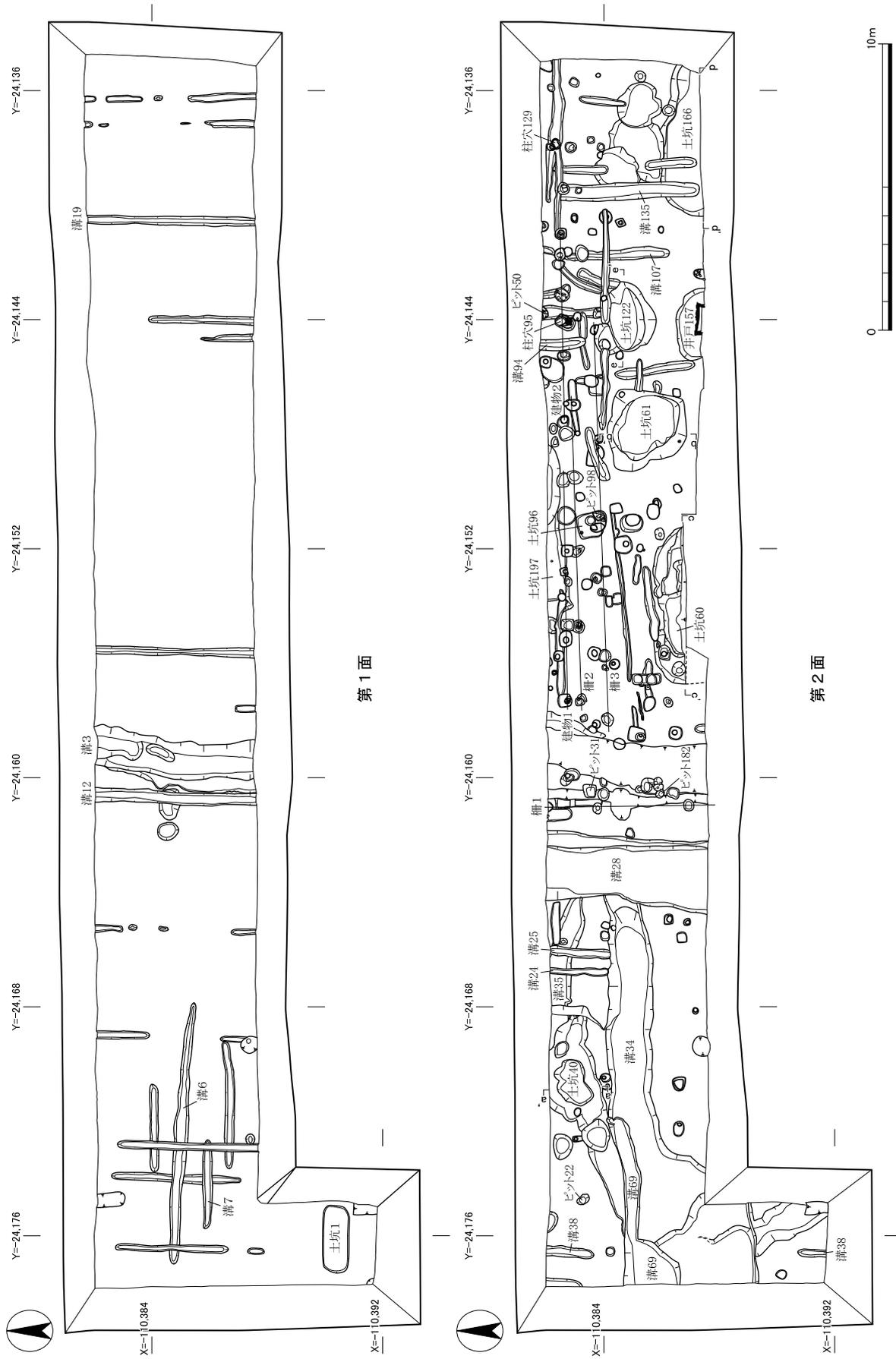


図9 調査区平面図 (1 : 200)

溝3 調査区中央で検出した南北溝である。検出した溝の中で最も規模が大きく、幅1.4～1.8m、深さ0.4～0.5mある。南北5.5m分を検出したが、南北ともに調査区外に延びる。溝断面の形状は底部がやや広いU字形を呈する。埋土は上層が黄灰色砂泥で、下層は黒褐色の粘質土である。溝内には水が溜まっていた時期があった。他の溝と比べ規模が大きく、平安期の町の中央を東西に区切るラインに近いことから、土地を区画する溝と考える。

土坑1 調査区西部で検出した土坑である。平面形は長方形を呈し、東西2.35m、南北0.9m、深さ0.15mである。埋土は黒色砂泥である。平安時代の整地層を掘り下げて成立しているために、緑釉陶器などが出土している。

2) 平安時代前期から中期の遺構 第2面 (図9、図版1-2)

平安時代中期の整地層とその下層で前期に該当する遺構群を検出した。遺構には建物、柵、井戸、柱穴、ピット、土坑、溝などがある。柱穴は確実に柱あたりを確認したものとし、それ以外はピットとした。大型の土坑は土取り穴とみられる。

整地層 調査区全体に0.2～0.5mの厚さで堆積している整地層で、黒褐色砂泥層や黒褐色粘質土を主体としている。西側が薄く、東側に行くにしたがって厚い堆積となる。今回の調査の出土遺物の大半がこの層から出土している。種類は土師器・須恵器・白色土器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入磁器・土馬・瓦類などが出土しており、土師器・須恵器が量的には多いが、灰釉陶器・緑釉陶器の出土も目立つ。

建物1 (図10、図版2-2) 調査区北部で検出した掘立柱建物であり、東西3間分(柱穴51・83・84・138)を検出した。柱間は西から2.65m・2.60m・2.50mである。隅丸方形の掘形を持ち、径は0.45～0.5m、深さは0.27～0.35mである。南側に対応する柱穴がないことから建物の南辺と考えられ、東西棟建物と推定できる。

建物2 (図10、図版2-1) 同じく調査区北部で検出した掘立柱建物であり、東西3間分(柱穴110・119・137・118)を検出した。柱間は2.1mである。円形の掘形を持ち、根石を有する。掘形の径は0.4～0.5m、深さは0.12～0.15mである。これも建物1と同様に南側に対応する柱穴がないことから建物の南辺と考えられ、東西棟建物と推定できる。

柵1 (図11) 後述する南北溝28の東側で検出した南北の柵(柱穴200・143・178)である。柱穴は円形の掘形を持ち、3間分を検出したが北側も南側も調査区外へ延びる。ただし、2間目と3間目の間には攪乱があったため柱穴は確認できなかった。柱間は1.7mであり、掘形の径は0.35～0.4mである。

柵2 (図11) 調査区北部で検出した東西方向の柵であり、東西4間分(柱穴52・86・104・103・114)を検出した。柱間は西から2.5m・2.6m・2.6m・2.6mである。掘形の径は0.35～0.48m、深さは0.15～0.4mである。東側の3基には径0.15～0.25mの柱当たりが確認できる。建物1の0.5m南にほぼ並行して位置する。柱穴104から平安時代前期の須恵器風字硯(図15-28)が出土している。

柵3 (図11) 調査区北部で検出した東西方向の柵であり、東西6間分(柱穴47・53・79・97・

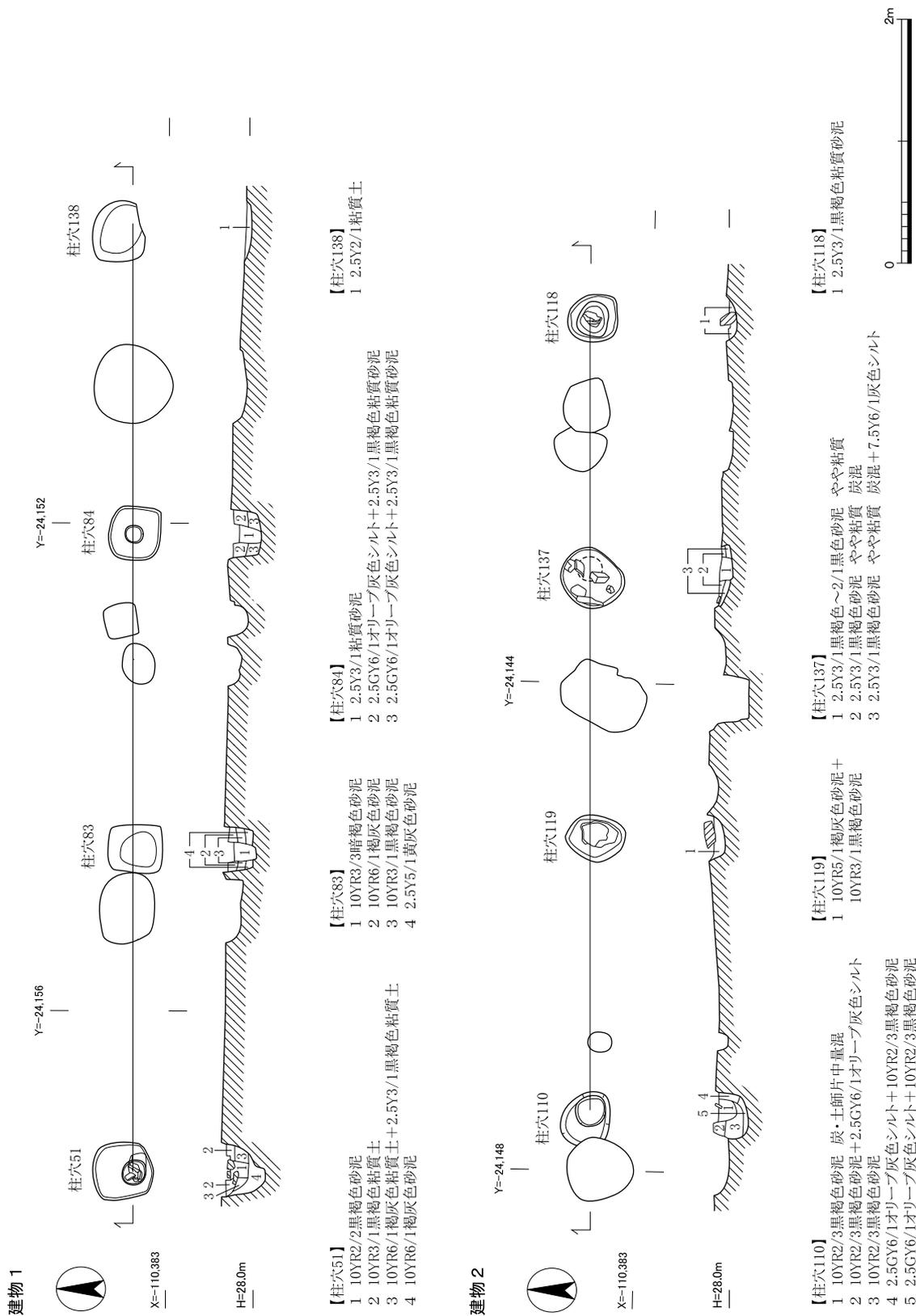


図10 建物1・2実測図 (1:50)

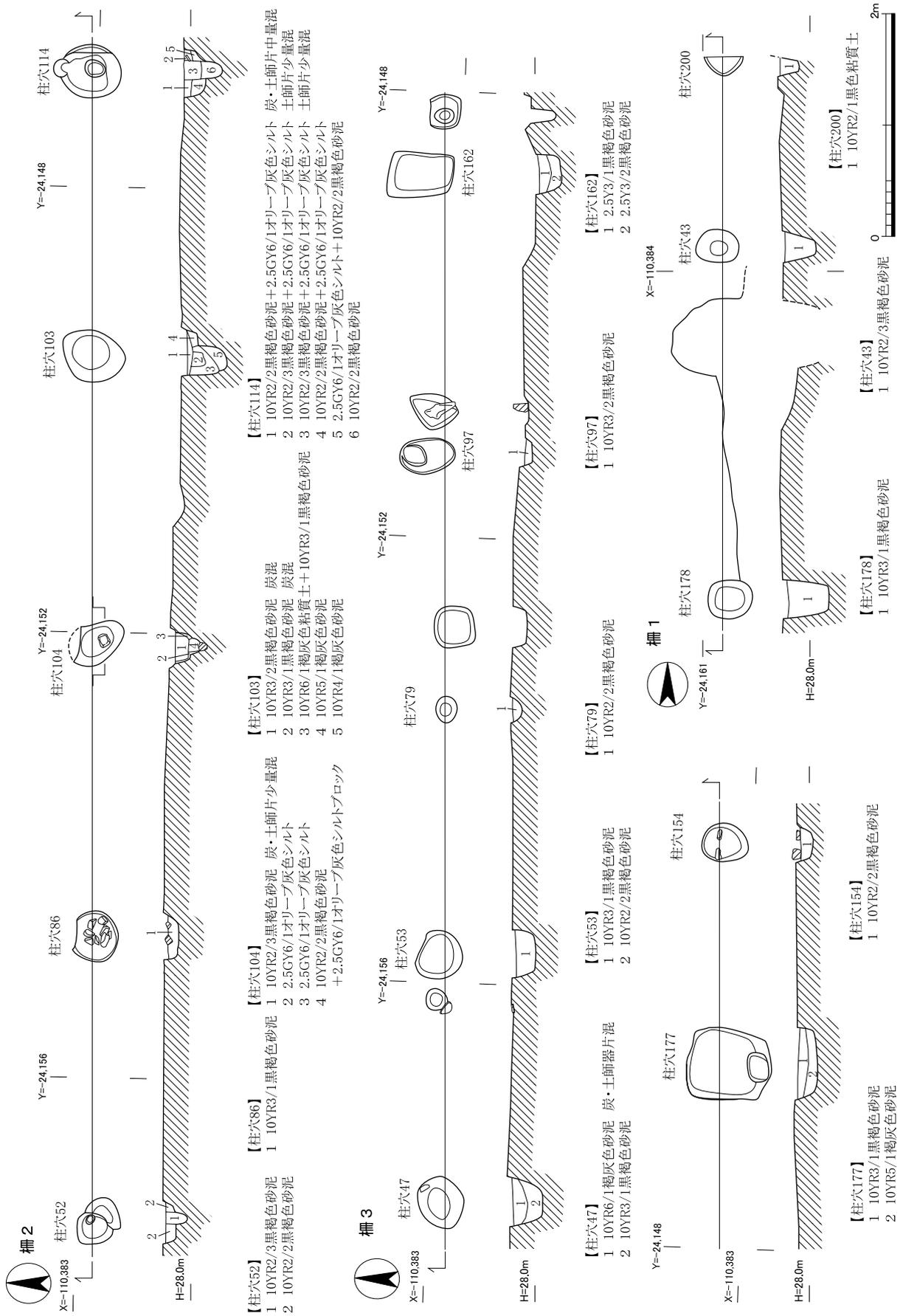
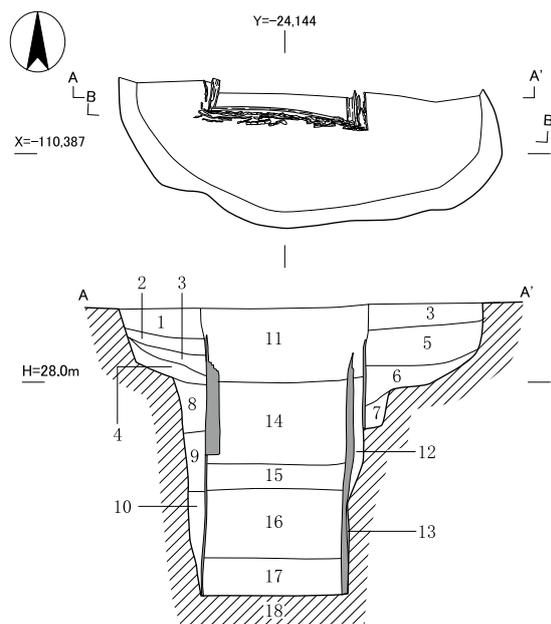


図11 柵1～3実測図(1:50)

162・177・154) を検出した。柱間はそれぞれ間隔にバラツキがあり、西から2.3m・2.2m・2.7m・2.1m・2.4m・2.0mである。柱穴の径は西側4基および最も東の1基は0.25～0.5mであるが、東側から2基・3基目は0.65～0.8mと大きい。平安時代前期の須恵器杯(図15-26)が出土している。建物1の1.4m南にほぼ並行して位置する。柵の推定ライン上に他の柱穴が並ぶことから、建て替えがあったとみられる。

溝28 調査区中央やや西寄りで見出した南北溝である。幅2.0～2.8m、深さ0.3～0.5mある。溝の断面形は浅い皿型で、東肩部が一段浅くなっている。埋土は黒褐色粘質土である。北も南も調査区外に延びる。条坊復元モデルから四町の中央部にあたり、東二行と東三行の境にあたる地点に位置している。



- | | |
|--|-----------------------------|
| 1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 | 10 10Y5/1灰色粘土 |
| 2 2.5Y3/1黒褐色粘質土
+2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 | 11 10YR3/1黒褐色粘土 |
| 3 2.5Y3/1黒褐色粘質土
+10GY6/1緑灰色シルトブロック混 | 12 10YR2/1黒色粘土 |
| 4 2.5Y2/1黒色粘質土 | 13 2.5Y3/1 黒褐色粘土 |
| 5 3に多量の緑灰色シルトブロック混 | 14 13に灰色粘土混 |
| 6 2.5Y3/1黒褐色粘質土 | 15 10YR2/1黒色粘土 |
| 7 7.5Y4/1灰色粘質土 | 16 10YR2/1黒色粘土、
15よりも粘質弱 |
| 8 2.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 | 17 10YR2/1黒色粘質土 |
| 9 10YR2/1黒色粘土 | 18 10GY5/1緑灰色砂礫
微砂含(地山) |

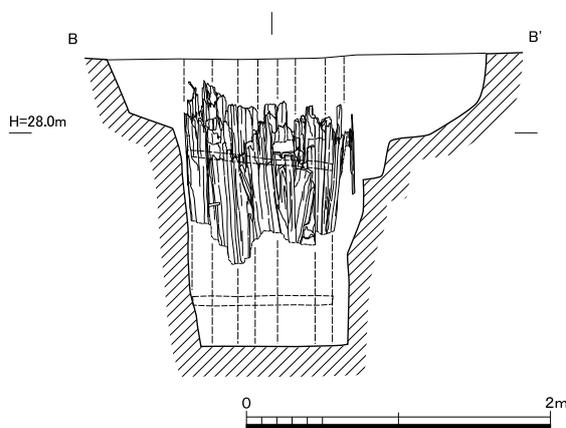


図12 井戸157実測図(1:50)

置している。

溝34 調査区西部で見出した東西方向の溝である。Y=-24,172より東は南北幅1.1～1.7mあるのに対して、西側のY=-24,176付近では南北幅が4.4～4.7mと拡がり、湿地状を呈していた。埋土は灰色粗砂や灰色シルトブロックが堆積する。さらに西側に拡がりをもつとみられる。

溝38 調査区西部で見出した南北溝である。上面が削平されており、調査区の北側と南側で見出した。幅0.25～0.4m、深さ0.04mある。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。平安時代前期の白色土器皿(図15-21)が出土している。

溝94 調査区東部で見出した南北溝である。上面が削平されており、調査区の北側で見出した。幅0.35～0.4m、深さ0.1mある。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。埋土は黒色粘質土である。平安時代前期の須恵器杯(図15-25)が出土している。

溝107 調査区東部で見出した南北溝である。調査区の南側では削平されて消滅している。幅0.25～0.4m、深さ0.09mある。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。埋土は黄灰色砂泥、灰色砂泥である。平安時代前期の土師器碗・須恵器杯(図15-6・7)が出土している。

溝135 調査区東部で検出した南北溝である。調査区の南端部では削平されて消滅している。幅0.45～0.6m、深さ0.1mある。溝断面の形状は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色砂泥である。平安時代前期の須恵器蓋（図15-24）が出土している。

井戸157（図12、図版2-3・2-4） 調査区東側で検出した。南壁際で北部を1/3程度検出した方形縦板組み井戸である。検出面での東西掘形が2.6mある。井戸枠部分の東西長は1.1mあった。井戸枠を構成する縦板は北面で7枚あり、各辺は三重の縦板で構成されていた。板材は幅0.16～0.19m、長さ0.79～1.55m、厚さ0.015～0.028mある。横棧は0.045×0.06m、長さ0.94～1.00mあった。埋土は上層が黒褐色粘土、下層は黒色粘質土であった。壁際での検出であり、井戸枠材の腐食も著しかったので、残りの良好な材のみ取り上げた。

柱穴95（図13） 調査区東部で検出した柱穴である。東西径0.52m、南北径0.7m、深さ0.32mある。直径0.28m、長さ0.32mの柱根が遺存していた。柱材は面取りなどを行っておらず丸柱とみられる。

柱穴129 調査区東部で検出した柱穴である。東西径0.4m、南北径0.3m、深さ0.35mある。径0.2mの柱あたりが確認できる。埋土は黒褐色砂泥である。平安時代前期の黒色土器椀（図15-23）が出土している。

ピット22 調査区西部で検出した小穴である。直径0.4m、深さ0.16mある。埋土は黒色砂泥である。長岡京期の軒平瓦（図20-108）が出土している。

ピット31 調査区中央やや西側で検出した小穴である。東西径0.45m、南北径0.45m、深さ0.35mある。埋土は黒褐色砂泥である。平安時代前期の黒色土器椀（図15-22）が出土している。

ピット50 調査区東部で検出した小穴である。東西径0.5m、南北径0.2m以上、深さ0.15mある。埋土は黒褐色粘質土である。平安時代前期の土師器皿（図15-19）が出土している。

ピット98 調査区中央やや東側で検出した小穴である。東西径0.35m、南北径0.4m、深さ0.15mある。埋土は黒褐色粘質砂泥である。平安時代前期の灰釉陶器壺（図15-29）が出土している。

ピット182 調査区中央部で検出した小穴である。東西径0.35m、南北径0.3m、深さ0.28mある。埋土は黒色粘質土である。平安時代前期の飾り金具（図21-112）が出土している。

土坑40（図14） 調査区西側の北部で検出した。平面形は不定形で、東西4.1m、南北2.0m、深さ0.25mある。さらに北側は調査区外に延びる。埋土は上層が黒色砂泥、下層には黒色粘質土が堆積する。

土坑60（図14） 調査区中央の南側で土坑の北部を検出した。平面形は不定形で、東西3.3m、南北1.2m、深さ0.3～0.7mある。南側はさらに調査区外に延びる。埋土は上層が黒色粘質土、下層

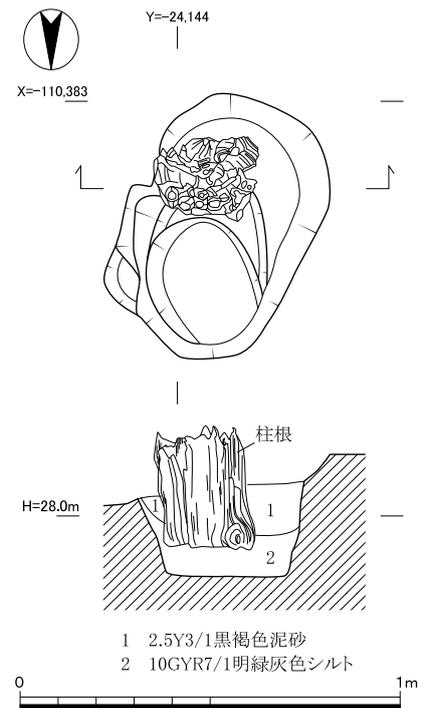


図13 柱穴95実測図（1：20）

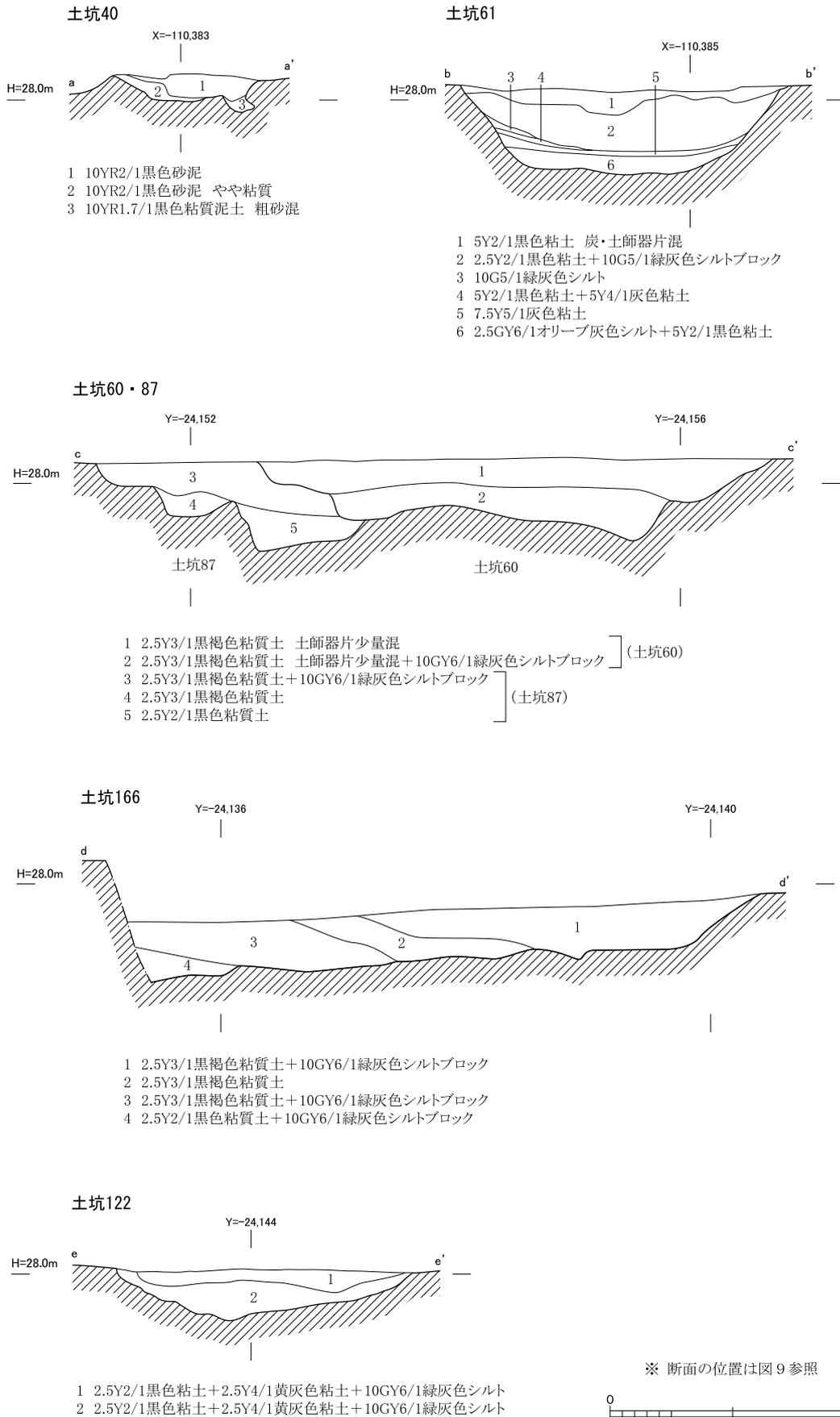


図14 土坑40・60・61・87・122・166実測図 (1:50)

には黒色粘質土と緑灰色シルトブロックが堆積する。

土坑61 (図14) 調査区やや東側で検出した。平面形は不定形で、東西2.9m、南北2.7m、深さ0.7mある。埋土は上層が黒色粘土で炭が多く混じる。下層には黒色粘土とオリーブ灰色シルトが堆積する。

土坑96 調査区中央やや東寄りで検出した小型の土坑である。平面形は長方形を呈し、東西0.9m、南北1.1m、深さ0.09mである。埋土は黒褐色粘質砂泥である。平安時代前期の土師器椀、須恵器蓋・杯 (図15-1~5) が出土している。

土坑122 (図14) 調査区東側で検出した。平面形は不定形で、東西2.4m、南北1.8m、深さ0.45mある。埋土は上層が黒色粘土と黄灰色粘土、下層には黒色粘土と緑灰色シルトが堆積する。

土坑166 (図14) 調査区東側の南部で検出した。平面形は不定形で、東西5.3m以上、南北1.5m以上、深さ0.35~0.55mある。さらに東と南側は調査区外に延びる。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層には黒色粘土と緑灰色シルトが堆積する。

土坑197 調査区中央の北端で検出した大型の土坑である。平面形は長方形を呈するとみられ、東西3.1m、南北0.45~0.7m、深さ0.6mである。埋土は黒色粘質土である。平安時代前期の須恵器瓶子 (図15-27) が出土している。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物が遺物整理用コンテナに52箱出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・金属製品・木製品などの種類がある。出土遺物の約9割強は土器類が占め、次いで瓦類は1割弱である。その他の種類の遺物はごくわずかである。

出土した遺物は、ほとんどが平安時代前期から中期のもので、平安時代中期の整地層から最も多くの遺物が出土した。室町時代以降の遺物はごく少量である。なお、平安時代後期の遺物は出土していない。

以下では、時代の古いものから順に、遺物の概要を述べる。個々の遺物の詳細については、遺物一覧表（付表1～3）に掲載した。

(2) 土器類（図15～19、図版3、付表1）

1) 平安時代

平安時代の遺物は、井戸・土坑・溝・柱穴・ピット・整地層などから出土した。土器類には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・白色土器などがあり、青磁・白磁などの輸入磁器もある。

土坑96（図15、図版3） 土師器・須恵器が出土している。平安京I期中段階¹⁾に属する。

1・2は土師器碗Aである。1は口径13.4cm、高さ3.3cmある。2は口径13.8cm、高さ3.7cmある。ともに体部外面にヘラケズリを施す。口縁部から内面はナデで仕上げる。3～5は須恵器である。3は杯蓋である。口径15.2cm、高さ1.2cmある。天井部は平坦で、つまみはもたない。内外面ともにナデで仕上げる。4・5は杯身である。4は高台をもたない杯Aに分類されるものである。口径13.4cm、高さ3.5cmある。底部から体部はやや内湾気味に外上方に延びる。内外面ともに回転ナデで仕上げる。5は高台が付く杯Bに分類されるものである。口径12.6cm、高さ4.5cmある。底部から

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、黒色土器、輸入陶磁器、土製品、瓦、木製品、金属製品	58箱	土師器16点、須恵器35点、緑釉陶器16点、灰釉陶器15点、白色土器2点、黒色土器4点、輸入陶磁器6点、土製品1点、瓦16点、金属製品3点	1箱	50箱
室町時代	土師器	1箱		0箱	1箱
合 計		59箱	114点（7箱）	1箱	51箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

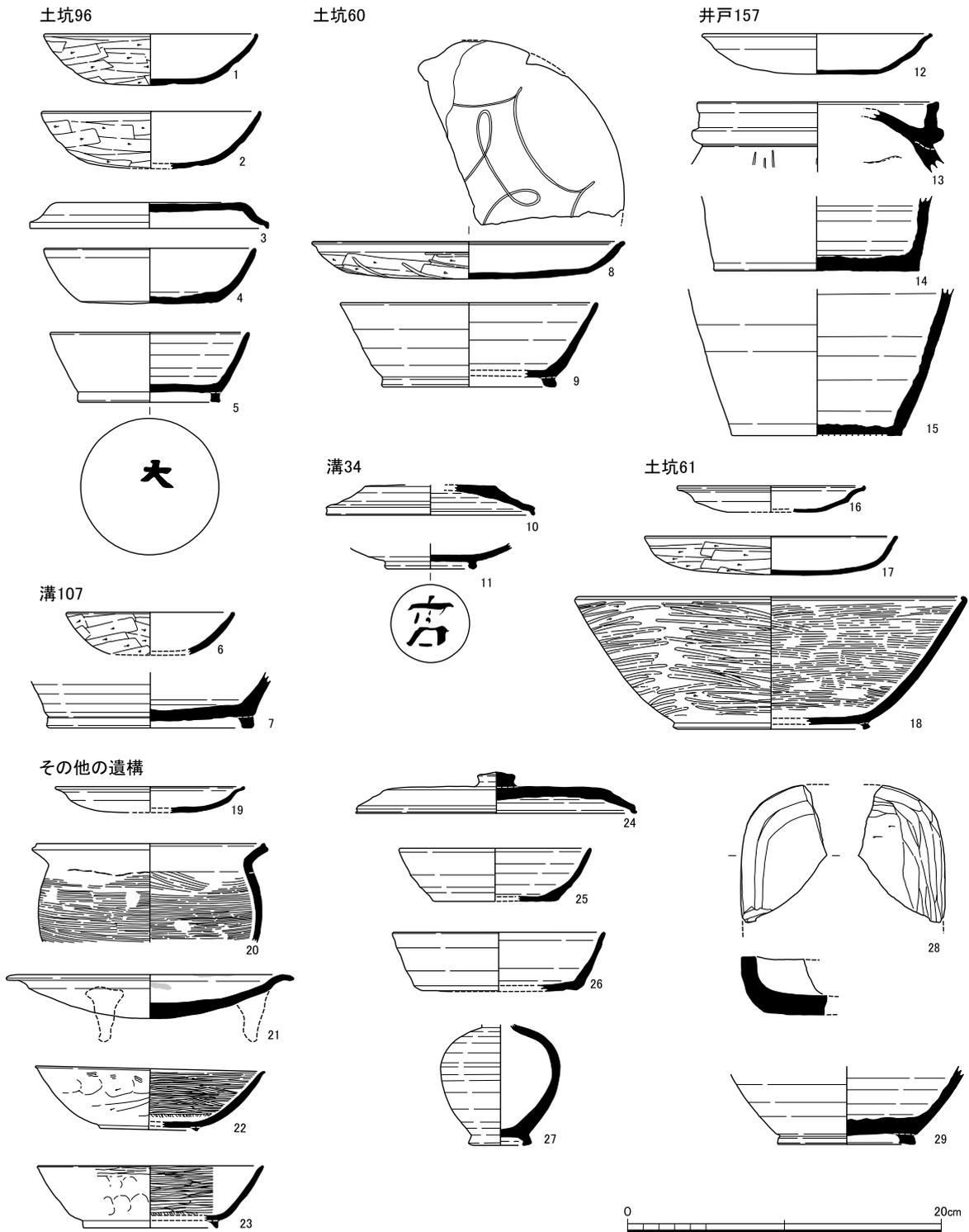


図15 土坑・溝・井戸・その他の遺構出土土器実測図（1：4）

体部は外上方に直線的に延びる。内外面ともに回転ナデで仕上げる。高台内には「大」の墨書がある（図17）。

溝107（図15） 土師器・須恵器が出土している。平安京I期中段階に属する。

6は土師器碗Aである。口径10.5cm、高さ2.8cmある。体部外面にヘラケズリを施す。口縁部から内面はナデで仕上げる。7は須恵器杯である。高台の付くB類の底部である。やや大型で底部径

12.8cmある。底部と体部の境に輪高台を貼り付ける。

土坑60（図15） 土師器・須恵器が出土している。平安京Ⅰ期新段階に属する。

8は土師器皿Aである。口径19.8cm、高さ2.4cmある。体部外面にヘラケズリの後に粗いヘラミガキを施す。内面には暗文を施す。内面の一部に煤が付着する。9は須恵器杯Bである。口径16.2cm、高さ5.4cm、高台径は10.8cmある。内外面ともに回転ナデで仕上げる。

溝34（図15） 須恵器が出土している。平安京Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

10・11は須恵器である。10は杯蓋である。口径13.2cm、高さ2.0cmある。天井部は平坦で、中心部が欠損していることからつまみの有無は不明である。内外面ともに回転ナデで仕上げる。11は皿の底部である。高台径は5.5cmある。高台内に墨書があるが字は不明である（図17）。

井戸157（図15、図版3） 土師器・須恵器が出土している。平安京Ⅱ期中段階に属する。

12は土師器杯Aである。口径14.4cm、高さ2.6cmある。器壁は薄く、口縁部から内面は丁寧なナデで仕上げる。外面下半部から底部はオサエ痕を残す。13～15は須恵器である。13は円面硯である。周縁部と海部と脚部の上部が遺存している。脚部の上部には装飾の陰刻線が施される。14・15は壺底部とみられる。14は底部径13.0cmある。体部は真上に延びていく。15は底部径10.8cmある。体部は外上方に延びていく。ともに外面は回転ナデで仕上げる。

土坑61（図15、図版3） 土師器が出土している。平安京Ⅱ期新段階に属する。

16・17は土師器皿Aである。16は口径11.8cm、高さ1.7cmある。器壁が薄く、口縁部から内面はナデで仕上げる。外面下半部から底部はオサエ痕を残す。17は口径16.0cm、高さ2.5cmある。体部外面にヘラケズリを施す。口縁部から内面はナデで仕上げる。内面に煤が付着する。18は大型の杯である。高台の付く杯Bに分類されるものである。口径24.5cm、高さ8.5cm、底部径11.8cmある。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。

その他の遺構（図15、図版3） 土師器・須恵器・白色土器・黒色土器・灰釉陶器が出土している。

19・20は土師器である。19は土師器皿Aである。口径12.0cm、高さ1.7cmある。器壁は薄く、内面と外面上半部を丁寧なナデで仕上げる。外面下半部から底部はオサエ痕を残す。20は甕である。口径14.4cmある。体部内外面ともに横方向のハケメを施す。口縁部は内外面ともにナデで仕上げる。外面に煤が多く付着する。19はピット50、20は土坑122から出土。

21は白色土器である。三足盤とみられる。口径18.0cm、残存高2.8cmある。内外面ともにナデで仕上げる。焼成は不良で軟質である。溝38から出土。

22・23は黒色土器碗である。内面のみを黒色化したA類である。22は口径14.6cm、高さ3.9cm、底径6.2cmある。23は口径14.2cm、高さ4.0cm、底径8.6cmある。平底の底部に断面三角形の高台が付く。底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキを施す。内面は底部・体部ともに横方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。22はピット31、23は柱穴129から出土。平安京Ⅱ期中段階から新段階に属する。

24～28は須恵器である。24は蓋である。口径17.8cm、高さ2.7cmある。上面中央部に扁平化した

径2.4cmの宝珠形のつまみが付く。内外面ともに回転ナデで仕上げる。25・26は杯である。ともに高台のない杯Aである。25は口径12.0cm、高さ3.4cm、底径7.8cmある。径の小さい底部から体部はやや内湾気味に外上方に延びる。26は口径13.6cm、高さ3.8cm、底径9.7cmある。径の大きな底部から体部は外上方に直線的に延びる。ともに内外面ともに回転ナデで仕上げる。24は溝135、25は溝94、26は柵3柱穴162から出土。平安京I期中段階から新段階に属する。27は瓶子である。胴部最大径7.6cm、底径4.0cmある。高台部はハの字形に外に拡がる。外面は回転ナデで仕上げる。土坑197から出土。平安京I期中段階に属する。28は風字硯である。周縁部と陸部の一部である。外面はヘラケズリを施し、内面はナデで仕上げる。柵2柱穴104から出土。

29は灰釉陶器壺の底部である。高台径は8.6cm、高さ5.0cmが遺存する。体部外面には回転ヘラケズリ痕が残る。外面には灰釉が薄く施される。ピット98出土。猿投産。平安京I期中段階に属する。

整地層（図16、図版3） 土師器・須恵器・白色土器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・土製品が出土している。平安京I期新段階からII期新段階に属する。

30～34は土師器である。30は蓋のつまみ部分である。宝珠形のつまみは上部が扁平化している。31は椀Aである。口径10.4cm、高さ3.3cmある。体部外面にヘラケズリの後に粗いヘラミガキを施す。口縁部から内面はナデで仕上げる。32は皿Aである。口径18.5cm、高さ2.4cmある。体部外面にヘラケズリを施す。口縁部から内面はナデで仕上げる。33は高台の付く皿である。高台径7.2cmある。底面はヘラオコシ痕を残し高い高台を貼り付ける。体部外面はヘラケズリを施す。外面に煤が多く付着し、内面にも一部に確認できる。にぶい黄褐色の胎土である。京都以外の産地と考えられる。34は鉢Aである。口径18.6cm、残存高6.5cmある。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は丸く収める。体部外面にヘラケズリを施す。内面はナデで仕上げる。

35は白色土器皿の底部である。高台径6.2cmある。内外面ともに丁寧なナデで仕上げる。内面に煤が付着する。胎土は浅黄橙色を呈する。

36は土製品の土馬である。頭部をはじめ四肢・尾部の先端部を全て欠損する。残存長7.6cm、残存高4.3cmある。胎土は密で、灰黄色を呈する。

37～56は須恵器である。37～43は蓋である。37～40は上面中央部に宝珠形のつまみが付く。37・38は小型で壺の蓋とみられる。37は口径6.0cm、高さ1.7cmある。38は口径8.0cm、高さ2.4cmある。38にはつまみの両側に円孔が穿たれる。円孔は焼成前に上から穿たれ、焼成後に下面の孔周辺を打ち欠く。外面は丁寧なナデで仕上げる。胎土は密で、灰白色を呈する。39・40は上面中央部に宝珠形のつまみが付く。40は口径16.6cm、高さ2.0cmある。ともに天井部に回転ヘラケズリの痕を残す。41はつまみのないタイプである。天井部は回転ナデで仕上げる。口径14.6cm、高さ2.3cmある。内外面ともに墨もしくは煤が付着する。42・43は天井部中央を欠くがつまみの付くタイプとみられる。42・43ともに口径16.6cmある。44～50は杯である。44・45はともに高台のない杯Aである。44は口径12.1cm、高さ4.3cm、底径6.8cmある。底部から体部はやや内湾気味に外上方に延びる。体部外面には回転ヘラケズリ痕が残る。45は口径12.0cm、高さ3.2cm、底径6.8cmある。内外面とも

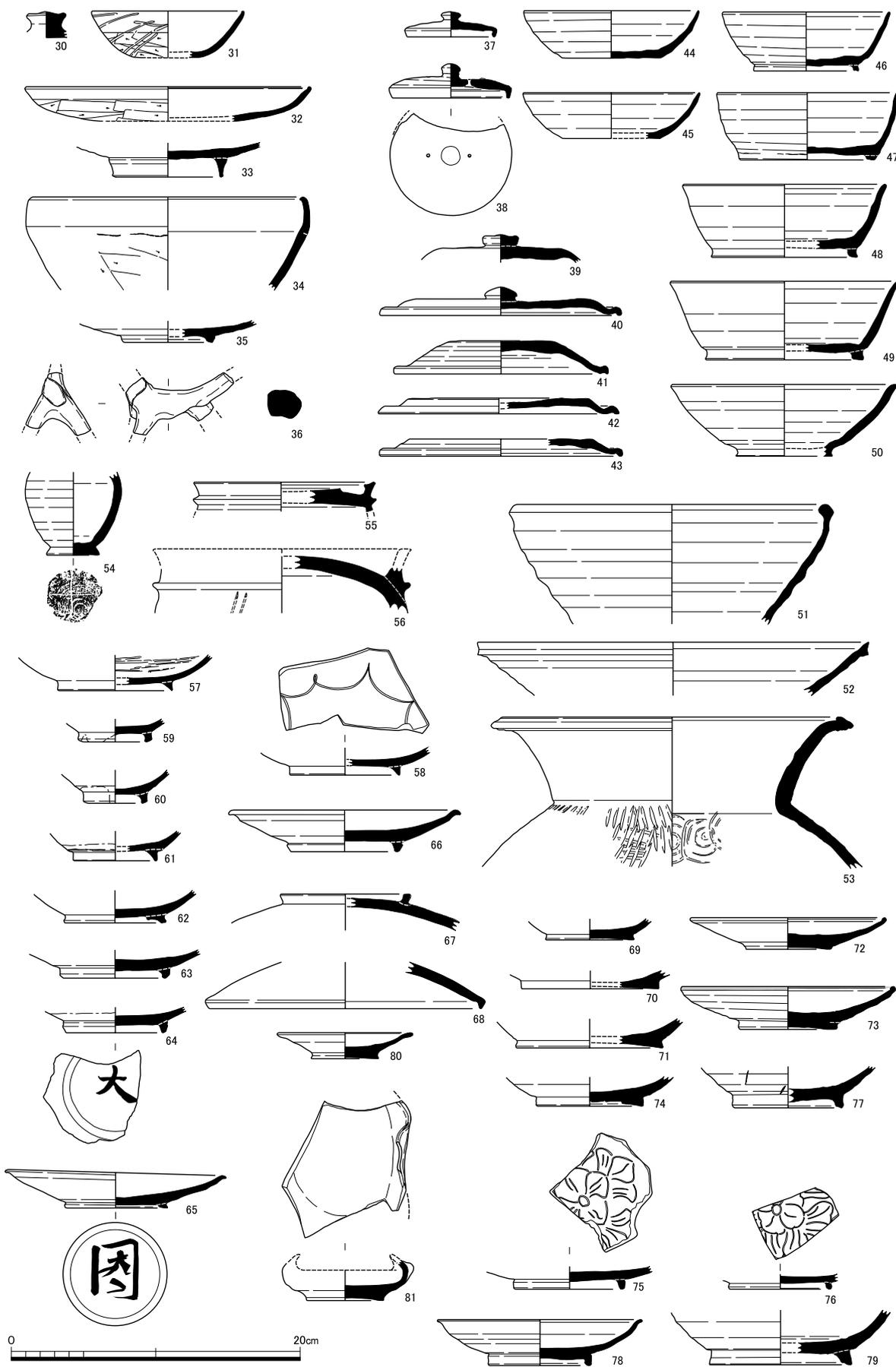


图16 整地层出土土器实测图 (1:4)

に回転ナデで仕上げる。46～49は貼り付けの輪高台をもつ杯Bである。46・47はやや小振りである。46は口径11.5cm、高さ4.1cm、高台径7.2cmある。底部から体部は外上方に開く。47は口径12.4cm、高さ4.7cm、高台径9.2cmある。底部から体部は上方に延びる。ともに底部外面には回転ヘラケズリ痕が残る。48は口径13.8cm、高さ5.1cm、高台径10.0cmある。体部内外面は回転ナデで仕上げる。49は大振りで、口径15.6cm、高さ5.5cm、高台径11.0cmある。体部が直線的に外上方に開く。内外面ともに回転ナデで仕上げる。50は平高台である。口径15.4cm、高さ5.0cm、高台径6.6cmある。体部は内湾気味に緩やかに立ち上がる。口縁部は外反する。体部下方はヘラケズリ痕が残る。体部の内外面はナデで仕上げる。底部には糸切り痕が残る。内面に煤が付着する。51・52は鉢である。51は口径21.2cm、残存高8.3cmある。体部が内湾して口縁端部は玉縁状を呈する。体部下半は欠損する。平安京Ⅱ期新段階に属する。52は口径27.0cm、残存高3.7cmある。体部が直線的に外上方に開き、口縁端部は外側に面をもつ。体部の大部分を欠損する。53は甕の頸部から口縁部である。口径23.0cmある。体部からくの字状に頸部が立ち上がる。体部外面は横方向のタタキの後に縦方向のタタキを施す。体部内面には青海波文が残る。54は瓶子である。体部上半と口縁部を欠損する。底部径3.6cm、残存高5.8cmある。底部には糸切り痕が残り、「十」字の窯印が刻まれる。外面は丁寧なナデで仕上げる。55・56は円面硯である。55は周縁部と海部と陸部が遺存している。脚部の上部には透かしが確認できる。56海部から陸部にかけて遺存している。脚部の上部には装飾の陰刻線が施される。

57・58は黒色土器碗である。内面のみを黒色化したA類である。57は底径7.8cmある。58は底径7.6cmある。平底の底部に断面三角形の高台が付く。底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキを施す。内面は横方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。58の内面底部には暗文が施される。

59～68は灰釉陶器である。59～62は碗の底部である。59・60は小振りで、59は高台径4.4cm、60は3.8cmある。62は蛇ノ目高台である。高台径7.0cmある。63～66は皿である。64は高台径6.6cmある。高台内には「大」の墨書がある(図17)。65は口径15.0cm、高さ2.7cm、高台径6.8cmある。高台内にも墨書があるが字は不明である(図17)。66は口径15.2cm、高さ2.9cm、高台径7.0cmある。口縁端部を外反させる。内面底部には重ね焼きの痕が残る。67・68は蓋である。67は上面中央部に環状のつまみをもつ。68は端部である。口径18.8cmある。胎土や釉薬の色調から同一個体の可能性もある。61は東濃産で、以外は猿投産である。

69～81は緑釉陶器である。69～73は平高台である。69は小振りの碗で高台径6.0cmある。70は皿で高台径9.4cm、71は碗で高台径10.0cmある。ともに全面に施釉する。74は蛇ノ目高台の碗底部である。高台径7.2cmある。75～79は輪高台である。75・76は内面底部に陰刻花文を施す。陰刻花文された花卉の表現はやや退化している。ともに猿投産。77・79は碗である。79は高台径9.8cmある。釉はオリーブ灰色を呈する。近江産の古いタイプである。平安京Ⅱ期新段階に属する。78は皿である。口径14.0cm、高さ3.2cm、高台径6.2cmある。削り出し高台である。80・81は耳皿である。口縁部を内側に強く屈曲させる。底部には糸切り痕が残る。80には屈曲部は遺存していないが、底

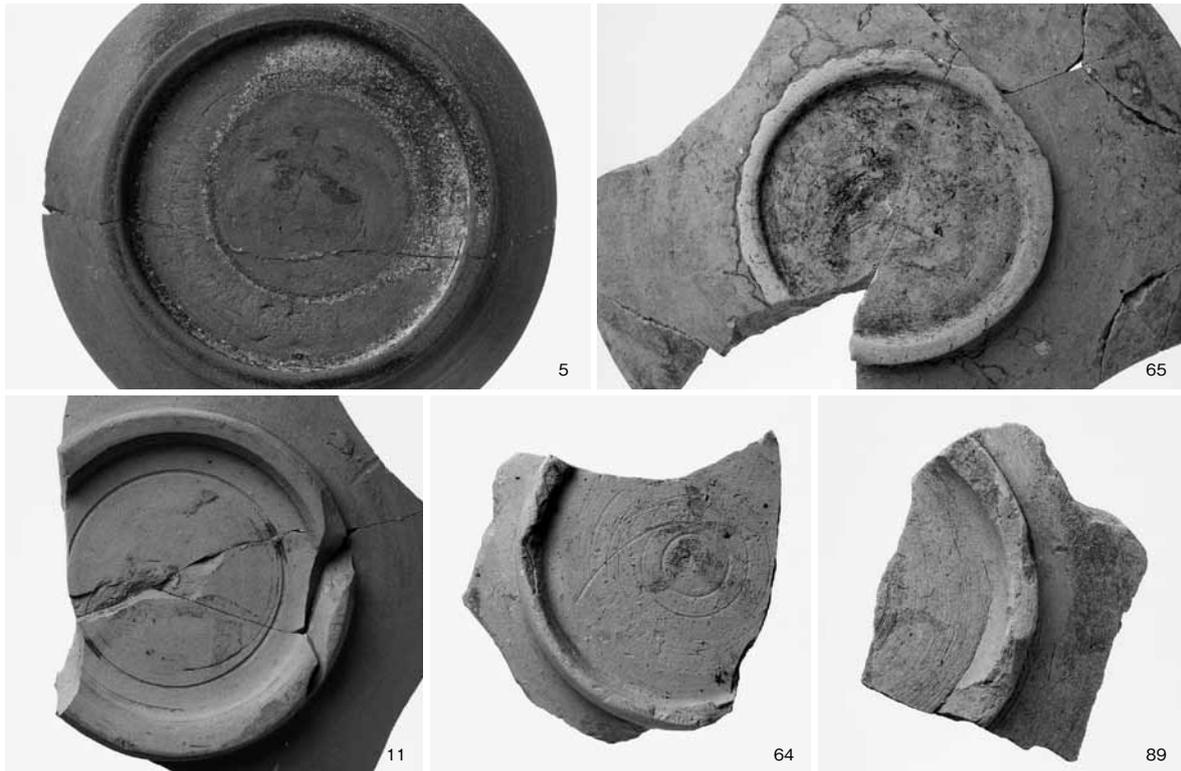


図17 墨書土器

部径が4.6cmと小さいことから耳皿とみられる。

第1面検出中（図18）土師器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土している。平安京Ⅱ期中から新段階に属する。

82は土師器皿Aである。口径13.6cm、高さ1.9cmと浅い器形である。外面はオサエ、口縁部はナデで仕上げる。

83～85は緑釉陶器である。83・84は皿の底部である。83は蛇ノ目高台である。高台径7.5cmある。焼成は軟質で、胎土の色調はオリーブ灰色を呈する。84は貼り付け高台である。高台径7.6cmある。85は椀の底部である。削り出し高台である。高台径6.1cmある。体部外面に回転ヘラケズリ痕が残る。

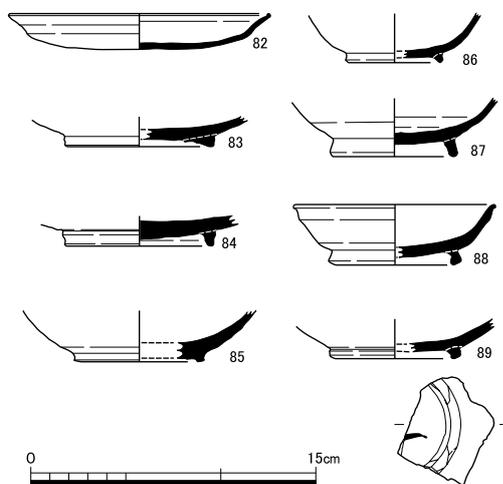


図18 第1面検出中出土土器実測図（1：4）

86～89は灰釉陶器椀の底部である。86は小振りで高台径4.8cmある。88の口縁端部は緩やかに外反する。内面底部には重ね焼きの痕が残る。89の高台径は6.2cmある。高台内には墨書が認められるが文字は不明である（図17）。

輸入磁器（図19）青磁や白磁が出土している。

90は青磁壺蓋である。上面に花文が浮き彫りで表される。陰刻花文には白泥を施して象嵌とする。下面は露胎である。口径10.3cm、高さ1.7cmある。整地層出土。91は青磁椀底部である。体部から口縁部を

欠く。高台底面は幅が広い蛇ノ目高台である。底径5.8cmある。第1面検出中出土。92は青磁椀である。底部を欠く。体部から口縁部は外上方に直線的に延びる。口径14.8cmある。第1面検出中出土。93は青磁皿である。底部を欠く。体部から屈曲して口縁部は外上方に直線的に延びる。口径15.5cmある。整地層出土。90～93は越州窯産である。

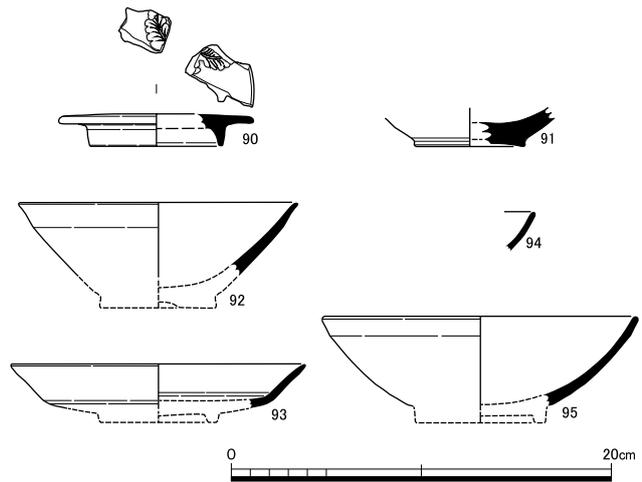


図19 輸入磁器実測図（1：4）

94は小型の白磁椀である。体部から底部を欠く。口縁部の破片である。口縁部

は外上方に直線的に延びる。口縁端部は玉縁状を呈しない。第1面検出中出土。95は白磁椀である。底部を欠く。体部から口縁部は外上方にやや内湾して延びる。口縁端部は玉縁状を呈しない。I類と釉調・胎土が類似する。口径16.6cmある。溝19出土。

2) 室町時代以降

第1面の耕作溝から土師器皿が出土しているが、少量で破片が小さいことから図示できなかった。

(3) 瓦類（図20、図版4、付表2）

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。ピット・土坑・溝などの遺構や整地層から出土した。ほとんどが奈良時代から平安時代前期に属し、平安時代後期の瓦当類は出土していない。

96・97は重圏文軒丸瓦である。ともに三重圏文を配する。97の周縁は素文である。97の瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上位はナデ、裏面はナデである。胎土は長石を含み灰白色、やや軟質である。難波宮・長岡京からの搬入瓦である。整地層から出土。

98～107は蓮華文軒丸瓦である。98・99の内区には蓮弁と小粒の珠文が密に配される。外区外縁には線鋸齒文を配する。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上位はナデである。胎土は長石を含む。表面は灰色、裏面はにぶい橙色である。やや軟質である。100は中房の位置に「旨」の異体字を配する。蓮弁は磨滅し不明瞭である。外区は2本の圏線内に小粒の珠文を密に巡らす。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部は周縁・側面から下面・裏面ともに縄目のタタキ痕が残る。胎土は長石を含み灰白色、やや軟質である。同範瓦が北野麿寺と左京四条二坊十四町から出土している。長岡京7193Ac型式である。101は複弁の間に間弁が配される。界線の外側には珠文が配される。周縁は素文である。間弁の部分に範傷がある。胎土は長石を含み灰色、硬質である。102は複弁の間に間弁が配される。二重の界線の間には珠文が配される。珠文の部分に範傷がある。胎土は

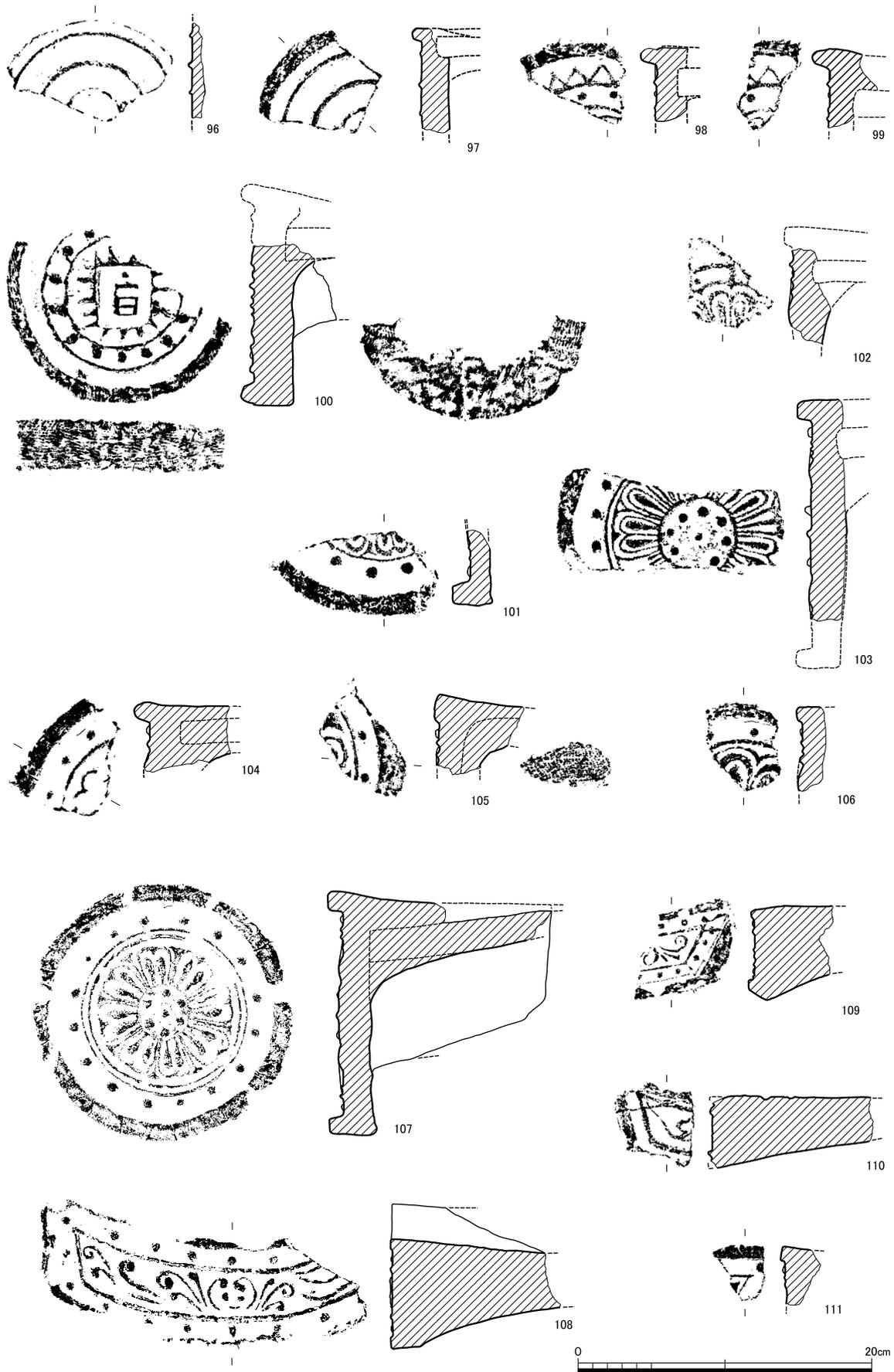


图20 軒瓦拓影·实测图 (1 : 4)

長石を含み灰色、硬質である。103は平坦な中房に蓮子を1 + 8配する。複弁蓮華文を配する。内・外区を二重の圏線で分ける。外区には珠文を密に配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面はナデである。胎土は長石を含み灰色、硬質である。瓦当面には多量の煤が付着する。西賀茂瓦窯NS151A型式と同文である。104は内区に複弁を配し、圏線の外側には珠文を配する。周縁は素文である。胎土は長石・赤色砂粒を含み暗灰色、やや軟質である。105は蓮弁の間に間弁を配し、圏線の外側には珠文を配する。周縁は素文である。瓦当裏面には布目痕が残ることから一本造り成形である。胎土は長石・クサリ礫を含む。表面は灰色、裏面は淡橙色である。やや軟質である。106は内区に蓮弁を配し、圏線の外側には珠文を配する。周縁は素文である。胎土は長石を含む。表面は灰色、裏面は灰白色である。やや軟質である。107は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。突出した中房に蓮子を1 + 6配する。内・外区を二重の圏線で分ける。外区には16個の珠文を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上位はナデ、下位はヨコケズリである。裏面は強いヨコナデである。胎土は長石・黒色砂粒を多く含み明褐色、表面は黒色、硬質である。西賀茂瓦窯NS154A型式と同文である。98～103・105・106は整地層出土。104は溝12、107は土坑60から出土。

108・109は唐草文軒平瓦である。108は外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きC字で、唐草文は両側に反転する。支葉は巻き込み、先端は丸くなる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎である。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁はヨコケズリ。平瓦凹面は布目の上に離れ砂を施す。凸面は縄目タタキを施す。側面はタテケズリである。顎部に朱が付着する。胎土は長石・石英を含み灰色、表面は灰黄色、硬質である。長岡京7731Aa型式と同範である。ピット22出土。109は外行唐草文で、支葉は強く巻き込み、反転する。外区は珠文が密に巡り、脇区との境に紡錘形の珠文を配する。周縁は素文である。珠文の部分に範傷がある。瓦当部上縁はヨコケズリ。平瓦凹面は布目、瓦当部下面はタテケズリ。側面はタテケズリである。胎土は長石を含み灰色、硬質である。平城宮6691B型式と同文である。整地層出土。

110は飛雲文軒平瓦である。内区には飛雲文を配する。狭い外区には珠文はない。周縁は素文である。範傷がある。直線顎である。瓦当部上縁はヨコナデ。平瓦凹面は布目、凸面はタテケズリを施す。側面はタテケズリである。瓦当部左上の部分に範傷がある。胎土は長石を含み灰色、硬質である。平城宮6802A型式と同文である。整地層出土。

111は軒平瓦の瓦当部右上部である。文様は不明であるが、唐草文の可能性はある。外区には珠文が配される。周縁は素文である。瓦当部上縁はヨコナデ。胎土は長石・石英を含み灰色、やや軟質である。整地層出土。

(4) 金属製品 (図21・22、付表3)

金属製品には、鉄製品・銅製品・金銅製品があり、飾り金具・掛け金具・毛抜きなどがある。平安時代の整地層から鉄製釘が少量出土しているが、腐食が著しく、図示することができなかった。

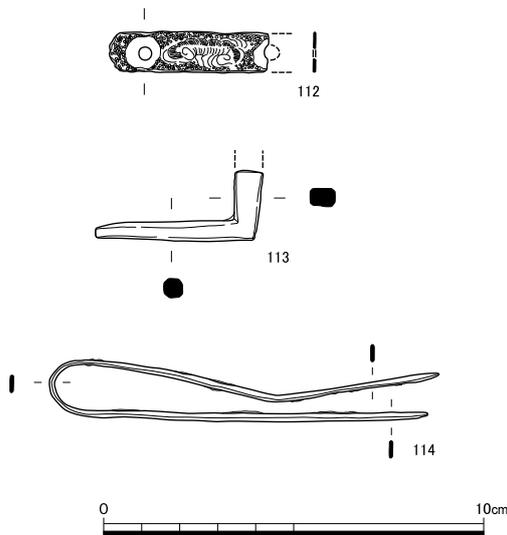


図21 金属製品実測図（1：2）



図22 金属製品

なお、資料は金属の成分分析を経ていないので、肉眼観察によるものである。

飾り金具 112は飾り金具である。幅1.1cm、厚さ0.1cm、残存長4.2cmある。薄い板状で端部は丸く仕上げる。端部付近に円孔を設ける。表面の地部分には魚々子打ちを施し、円孔と円孔の間には毛彫りで花文を表す。魚々子は細かいが、あまり密には施されていない。表面には鍍金を施す金銅製である。ピット182出土。

掛け金具 113は掛け金具とみられる。カギ形を呈する。横方向4.4cm、縦方向は上端部を欠き1.9cm残存する。横方向の先端部はやや尖り、断面形は方形を呈し、角は面取りされる。縦方向の断面形は長方形を呈し、角は面取りされる。表面は滑らかで丁寧に仕上げられている。銅製。整地層出土。

毛抜き 114は毛抜きとみられる。幅1.6cm、厚さ0.1cm、現状での長さ10.3cmある。形状はU字状でピンセット状を呈する。先端部分は徐々に細くなり丸く仕上げる。銅製。整地層出土。

註

- 1) 土器の名称と年代観については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年によった。

750頃		840頃		930頃		1010頃		1080~90頃		1180頃		1270頃		1360頃		1440頃		1500頃		1580~90頃		1660頃		1740年代頃		1820年代頃			
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV																
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

5. ま と め (図23)

今回の調査では、右京四条二坊四町北端の東西中心位置（東二行と東三行の境）で平安時代前期の南北溝28を検出した。この溝は四町内の中央、東二行と東三行を画する溝と考えられる。西側の東三行内では、流路状の溝とさらに西側に広がるとみられる湿地状堆積が認められ、遺構の密度は低いことが判明した。これに比べて東側の東二行内では、多くの柱穴や井戸などを検出するなど遺構密度が高い状態であった。

東二行内では北側の錦小路に近い部分で、東西建物2棟と東西方向の柵2条、南北方向の柵1条を検出した。建物1・2は、調査区の制約で東西方向に3間分を検出しており、ともに2間×3間の東西棟の南辺にあたると思う。両建物の間隔は約2mしかなく、2棟が併存していた可能性は低い。この位置は北一門の北半部にあたり、錦小路までの距離を考慮すれば、ともに小規模な建物と考えられる。東西方向の柵2・3は建物1の目隠しの用途をもつものと思われるが、これらの柵は近接した位置にあるため造り替えがあったと考えられる。さらに、建物や柵の周辺には、直径0.5m前後で深さ0.3~0.5mの規模の柱穴やピットが多く分布しており、複数の建物ないしは建物の建

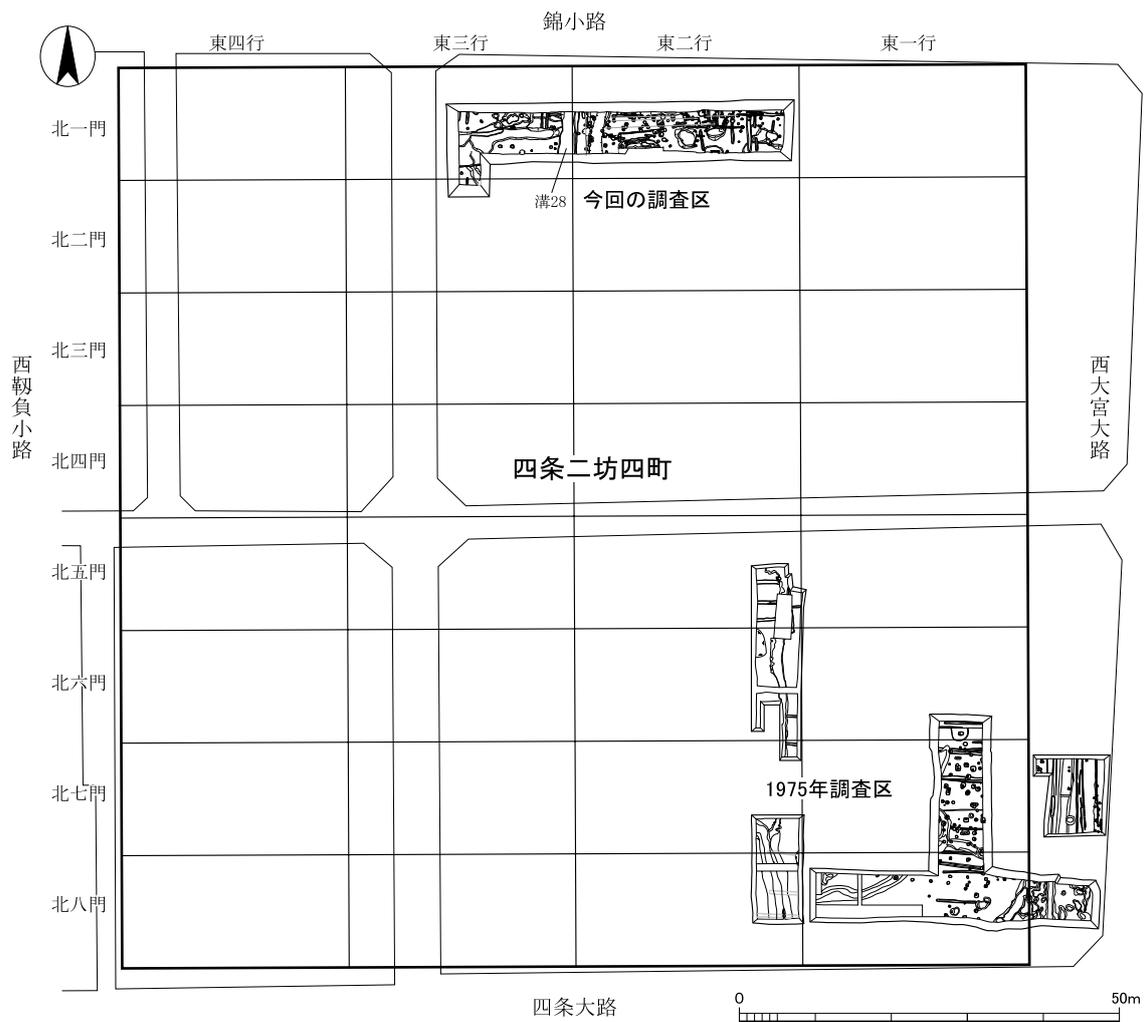


図23 右京四条二坊四町内の遺構配置図 (1:1,000)

て替えがあったと考えられる。また、南北方向の柵1は溝28から1.5m東に位置しており、東二行の西端にあたることから、この宅地の西限を画する塀などの施設と推測できる。

また、北一門内で井戸を検出している。この井戸の位置を考慮すれば、この付近が宅地内の日常生活空間「ケ」の部分にあたる考えられる。「ハレ」の部分は、北二門の南半以南に広がりをもつものと考えられる。宅地の規模は北四門までの1/4町を占めるものか、さらに南に広がるのかは不明である。

これらの建物や井戸などの宅地に関連する遺構群が廃絶した10世紀初頭には、厚さ0.3~0.5mの平安時代前期から中期の遺物を多く含む客土で当地を整地していることがわかった。この整地層の上面では、この時期の建物などの遺構は検出されなかったことから、宅地としての利用は継続されなかったとみられる。整地後の土地利用については不明であるが、遺構がないことから利用は低調であったとみられる。平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物は確認できないが、確実に室町時代以降から近代に至るまでの期間は耕作地として利用されていたことがわかった。

今回の調査地と同じ四町の南東部にあたる京都市身体障害者リハビリテーションセンターでの調査においては、9世紀の建物・柵・ピットなどや、西大宮大路路面と西側溝などを検出していた。宅地内の部分では、西大宮大路に近接した東一行の東半部分（北六門から北八門）でのみ平安時代前期の2間×3間の南北建物・柵・多くのピットなどを検出しているが、東一行の西半から東二行にかけては流路や湿地状の堆積となっていた。また、西大宮大路路面は10世紀に洪水で埋没していたことも判明していた。

今回調査と考えあわせると、四町内では西大宮大路に面する北東部分が微高地として宅地利用されており、南西側の多くの部分は湿地状となっていたことがわかる。このような状態が当地周辺の平安時代前期から中期にかけての環境および土地利用のあり方であったとみられる。

今回の調査結果も、周辺での既往調査と同様に平安時代中期には右京では遺構が希薄になるという状況を示しており、これは『池亭記』や『今昔物語集』における右京が衰退しているという記述と合致するものである。

付表1 土器類一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
1	土師器	椀	土坑96	13.4	3.3		60	内:2.5Y8/2灰白色、 外:7.5YR6/3にぶい褐色	
2	土師器	椀	土坑96	13.8	3.7		40	内:2.5Y8/2灰白色、 外:7.5YR7/4にぶい橙色	
3	須恵器	蓋	土坑96	15.2	1.6		33	N8/0灰白色	
4	須恵器	杯	土坑96	13.4	3.5	7.8	50	2.5Y8/1灰白色	
5	須恵器	杯	土坑96	12.6	4.5	8.9	100	N6/0灰色	墨書「大」
6	土師器	椀	溝107	10.5	2.8		口縁部30	内:7.5YR7/4にぶい橙色、 外:7.5YR6/6橙色	
7	須恵器	杯	溝107		(3.6)	12.8	高台部10	2.5Y7/1灰白色	
8	土師器	皿	土坑60	19.8	2.4		33	内:10YR6/2灰黄褐色、 外:10YR6/3にぶい黄橙色	
9	須恵器	杯	土坑60	16.2	5.4	10.8	12		
10	須恵器	蓋	溝34	13.2	2.0		口縁部30	2.5Y6/1黄灰色	
11	須恵器	皿	溝34		(1.7)	5.5	高台部75	N6/0灰色	墨書
12	土師器	杯	井戸157	14.4	2.6		70	10YR7/3にぶい黄橙色	
13	須恵器	円面硯	井戸157	16.6	(5.0)	16.6	小片	5Y8/1灰白色	
14	須恵器	壺	井戸157		(4.8)	13.0	底部50	2.5Y7/1灰白色	
15	須恵器	壺	井戸157		(9.4)	10.8	底・体部100	内:5Y6/1灰色、 外:N6/0灰色	
16	土師器	皿	土坑61	11.8	1.7		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
17	土師器	皿	土坑61	16.0	2.5		ほぼ100	10YR7/3にぶい黄橙色	
18	土師器	杯	土坑61	24.5	8.5	11.8	25	10YR7/3にぶい黄橙色	
19	土師器	皿	ピット50	15.4	1.7		小片	2.5Y7/2灰黄色	
20	土師器	甕	土坑122	14.4	(6.3)		口縁部20	内:10YR7/3にぶい黄橙色、 外:10YR6/2灰黄褐色	
21	白色土器	三足盤	溝38	18.0	2.8		75	10YR8/2灰白色	
22	黒色土器	椀	ピット31	14.6	3.9	6.2	20	内:N4/0灰色、 外:10YR6/4にぶい黄橙色	
23	黒色土器	椀	柱穴129	14.2	4.0	8.6	10以下	内:N3/0暗灰色、 外:10YR7/4にぶい黄橙色	
24	須恵器	蓋	溝135	17.8	2.7		50	10YR6/1褐灰色	
25	須恵器	杯	溝94	12.0	3.4	7.8	33	N7/0灰白色	
26	須恵器	杯	柵3柱穴162	13.6	3.8	9.7	口縁部20	2.5Y7/1灰白色	
27	須恵器	瓶子	土坑197	7.6	(7.7)	4	口縁部・頸部欠	N7/0灰白色	
28	須恵器	風字硯	柵2柱穴104	長8.7	1.2	幅5.4	小片	N5/0灰色	
29	灰釉陶器	壺	ピット98		(5.0)	8.6	高台部100	N7/0灰白色	
30	土師器	蓋	整地層	つまみ 2.7	(1.8)		つまみ部のみ	2.5Y7/3浅黄色	
31	土師器	椀	整地層	10.4	3.3		20	7.5YR6/4にぶい橙色	
32	土師器	皿	整地層	18.5	2.6		口縁部10	10YR7/3にぶい黄橙色	
33	須恵器	皿	整地層		(2.4)	7.2	高台部50	10YR5/3にぶい黄褐色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
34	土師器	鉢	整地層	18.6	(6.5)		口縁部10	10YR8/3浅黄橙色	
35	白色土器	皿	整地層		(1.5)	6.2	高台部50	10YR8/3浅黄橙色	
36	土製品	土馬	整地層	長7.6	(4.3)	幅4.5	33	2.5Y7/2灰黄色	
37	須恵器	蓋	整地層	6.0	1.7		66	N6/0灰色	
38	須恵器	蓋	整地層	8.0	2.4		80	N7/0灰白色	
39	須恵器	蓋	整地層		(2.0)		体部25	N5/0灰色	
40	須恵器	蓋	整地層	16.6	2.0		25	N8/0灰白色	
41	須恵器	杯蓋	整地層	14.6	2.3		50	N7/0灰白色	
42	須恵器	蓋	整地層	16.6	1.0		25	N6/0灰色	
43	須恵器	杯蓋	整地層	16.6	1.3		口縁部25	N6/0灰色	
44	須恵器	杯	整地層	12.1	4.3	6.8	70	5Y6/1灰色	
45	須恵器	杯	整地層	12.0	3.2	6.8	33	N7/0灰白色	
46	須恵器	杯	整地層	11.5	4.1	7.2	口縁部50	N4/0灰色	
47	須恵器	杯	整地層	12.4	4.7	9.2	50	N6/0灰色	
48	須恵器	杯	整地層	13.8	5.1	10.0	10	N7/0灰白色	
49	須恵器	杯	整地層	15.6	5.5	11.0	高台部33	N7/0灰白色	
50	須恵器	杯	整地層	15.4	5.0	6.6	口縁部12	N7/0灰白色	
51	須恵器	鉢	整地層	21.2	(8.3)		口縁部12	N6/0灰色	
52	須恵器	鉢	整地層	27.0	(3.7)		12	N6/0灰色	
53	須恵器	甕	整地層	23.0	(10.4)		33	N7/0灰白色	
54	須恵器	瓶子	整地層		(5.8)	3.6	体部25	N7/0灰白色	
55	須恵器	円面硯	整地層	13.0	2.05	11.7	33	5Y5/2灰オリーブ色	
56	須恵器	円面硯	整地層		(4.0)		体部16	N5/0灰色	
57	黒色土器	椀	整地層		(2.5)	7.8	高台部25	内:N3/0暗灰色、 外:10YR7/4にぶい黄橙色	
58	黒色土器	椀	整地層		(2.0)	7.6	高台部50	内:N2/0黒色、 外:7.5YR5/4にぶい褐色	
59	灰釉陶器	椀	整地層		(2.2)	4.4	高台部80	釉:7.5Y5/2灰オリーブ色、 胎:2.5Y8/2灰白色	
60	灰釉陶器	椀	整地層		(2.3)	3.8	高台部100	釉:7.5Y8/1灰白色、 胎:2.5Y8/2灰白色	
61	灰釉陶器	椀	整地層		(2.1)	5.8	高台部50	釉:5Y7/1灰白色、 胎:N7/0灰白色	
62	灰釉陶器	椀	整地層		(2.2)	7.0	高台部50	釉:10Y5/2オリーブ灰色、 胎:N8/0灰白色	
63	灰釉陶器	皿	整地層		(2.0)	7.0	高台部33	釉:5Y6/2灰オリーブ色、 胎:N8/0灰白色	
64	灰釉陶器	皿	整地層		(1.8)	6.6	高台部75	釉:7.5Y6/2灰オリーブ色、 胎:2.5Y8/2灰白色	墨書「大」
65	灰釉陶器	皿	整地層	15.0	2.7	6.8	75	釉:7.5Y7/1灰白色、 胎:2.5Y8/1灰白色	墨書
66	灰釉陶器	皿	整地層	15.2	2.9	7.0	50	釉:7.5Y5/1灰色、 胎:2.5Y6/1黄灰色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
67	灰釉陶器	蓋	整地層	つまみ 4.8	(2.7)		33	釉:7.5Y5/2灰オリーブ色、 胎:2.5Y7/1灰白色	
68	灰釉陶器	蓋	整地層	18.8	(3.2)		口縁部16	釉:10Y6/2オリーブ灰色、 胎:2.5Y7/1灰白色	
69	緑釉陶器	椀	整地層		(1.5)	6.0	底部25	釉:2.5GY5/1オリーブ灰色、 胎:N6/0灰色	
70	緑釉陶器	皿	整地層		(1.8)	9.4	12	釉:5G3/1暗緑灰色、 胎:10YR8/3浅黄橙色	
71	緑釉陶器	椀	整地層		(2.0)	10.0	12	釉:5G5/1緑灰色、 胎:N7/0灰白色	
72	緑釉陶器	皿	整地層	13.4	2.2	5.8	66	釉:2.5GY6/1オリーブ灰色、 胎:10YR8/3浅黄橙色	
73	緑釉陶器	皿	整地層	14.6	3.0	6.6	66	釉:2.5GY8/1灰白色、 胎:N7/0灰白色	
74	緑釉陶器	椀	整地層		(2.1)	7.2	高台部30	釉:2.5Y7/2灰黄色、 胎:10YR8/2灰白色	
75	緑釉陶器	皿	整地層		(1.6)	7.4	25	釉:7.5Y4/1灰色、 胎:N7/0灰白色	
76	緑釉陶器	皿	整地層	7.0	(1.0)		高台部25	釉:7.5Y4/1灰色、 胎:5Y5/2灰オリーブ色	
77	緑釉陶器	椀	整地層		(2.9)	7.4	高台部50	釉:2.5GY6/1オリーブ灰色、 胎:N7/0灰白色	
78	緑釉陶器	皿	整地層	14.0	3.2	7.0	高台部50	釉:5GY5/1オリーブ灰色、 胎:N6/0灰色	
79	緑釉陶器	椀	整地層		(3.8)	9.8	25	釉:2.5GY6/1オリーブ灰色、 胎:N6/0灰色	
80	緑釉陶器	耳皿	整地層	9.0	1.6	4.6	33	釉:5GY7/1明オリーブ灰色、 胎:N8/0灰白色	
81	緑釉陶器	耳皿	整地層		(2.7)	5.2	66	釉:2.5GY5/1オリーブ灰色、 胎:N6/0灰色	
82	土師器	皿	第1面検出中	13.6	1.9		33	10YR8/3浅黄橙色	
83	緑釉陶器	皿	第1面検出中		(1.7)	7.5	高台部25	釉:10Y4/2オリーブ灰色、 胎:2.5Y5/1黄灰色	
84	緑釉陶器	皿	第1面検出中		(1.6)	7.6	高台部30	釉:5GY5/1オリーブ灰色、 胎:2.5Y8/2灰白色	
85	緑釉陶器	椀	第1面検出中		(2.7)	6.1	30	釉:5Y7/3浅黄色、 胎:10YR7/3にぶい黄橙色	
86	灰釉陶器	椀	第1面検出中		(2.6)	4.8	底部50	N7/0灰白色	
87	灰釉陶器	椀	第1面検出中		(3.1)	6.4	底部100	N8/0灰白色	
88	灰釉陶器	椀	第1面検出中	10.5	3.2	7.0	高台部50	釉:2.5Y7/2灰黄色、 胎:2.5Y7/1灰白色	
89	灰釉陶器	椀	第1面検出中		(2.2)	6.2	高台部33	釉:2.5Y8/2灰白色、 胎:2.5Y8/1灰白色	
90	輸入青磁	壺蓋	整地層	10.3	1.7				
91	輸入青磁	椀	第1面検出中		(2.1)	5.8	高台部30	釉:5Y5/3灰オリーブ色、 胎:2.5Y7/2灰黄色	越州窯
92	輸入青磁	椀	第1面検出中	14.8					越州窯
93	輸入青磁	皿	整地層	15.5					越州窯
94	輸入白磁	椀	第1面検出中						越州窯
95	輸入白磁	椀	溝19	16.6					

※ ()内の数字は破片の大きさを表示している。

付表2 軒瓦一覧表

No.	種類	文様	遺構名	色調	備考
96	軒丸瓦	重圏文	整地層	N7/灰白色	難波宮・長岡京
97	軒丸瓦	重圏文	整地層	2.5Y7/1灰白色	難波宮・長岡京
98	軒丸瓦	蓮華文	整地層	瓦当:N4/0灰色、裏:10YR7/3にぶい黄橙色	
99	軒丸瓦	蓮華文	整地層	瓦当:N4/0灰色、裏:10YR8/1灰白色、5YR6/6橙色	
100	軒丸瓦	蓮華文	整地層	10YR8/1灰白色	長岡京7193Ac型式
101	軒丸瓦	蓮華文	整地層	N5/0灰色	
102	軒丸瓦	蓮華文	整地層	N6/0灰色	
103	軒丸瓦	蓮華文	整地層	N4/0灰色	西賀茂瓦窯NS151A型式
104	軒丸瓦	蓮華文	溝12	N4/0暗灰色	
105	軒丸瓦	蓮華文	整地層	瓦当:N4/0灰色、裏:5YR8/3淡橙色	一本造り成形
106	軒丸瓦	蓮華文	整地層	瓦当:N4/0灰色、裏:10YR8/2灰白色	
107	軒丸瓦	蓮華文	土坑60	瓦当:N4/0灰色、裏:7.5YR7/2明褐灰色	西賀茂瓦窯NS154A型式
108	軒平瓦	唐草文	ピット22	瓦当:N5/0灰色、2.5Y7/2灰黄色	長岡京7731Aa型式
109	軒平瓦	唐草文	整地層	N5/0灰色	平城宮6691B型式
110	軒平瓦	飛雲文	整地層	N5/0灰色	平城宮6802A型式
111	軒平瓦	不明	整地層	N4/0灰色	唐草文か

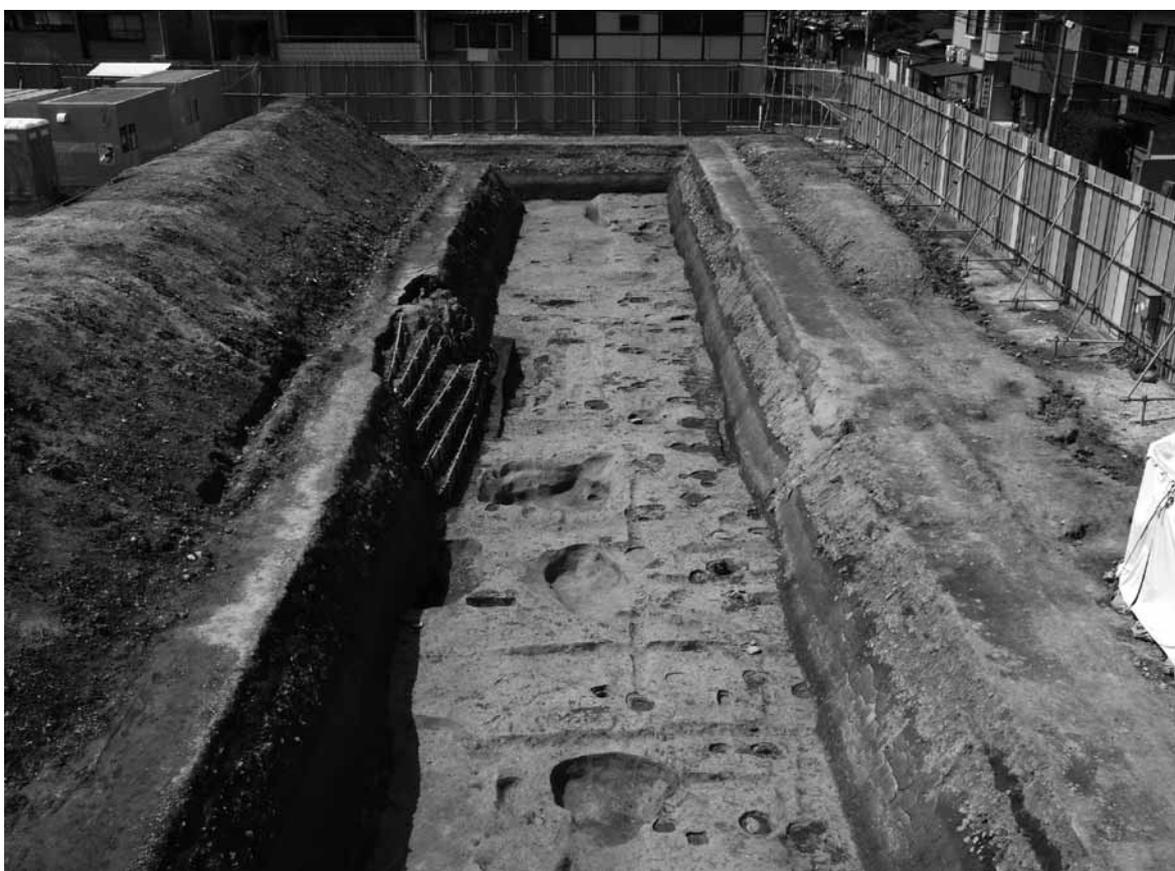
付表3 金属製品一覧表

No.	種類	遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ・厚さ (cm)	材質	備考
112	飾り金具	ピット182	4.2	1.1	0.1	銅	金銅製
113	掛け金具	整地層				銅	
114	毛抜き	整地層	10.3	1.6	0.1	銅	

圖 版



1 第1面全景（東から）



2 第2面全景（東から）



1 建物2 (南東から)



2 建物1 (東から)



3 井戸157 (北西から)



4 井戸157断割り (北から)





出土軒瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしじょうにぼうよんちょうあと・みぶいせき							
書名	平安京右京四条二坊四町跡・壬生遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-5							
編著者名	金島恵一・小檜山一良							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 みぶいせき 壬生遺跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 みぶひがしふちだちょう 壬生東淵田町 22番地	26100	1 462	35度 00分 17秒	135度 44分 07秒	2013年8月 5日～2013 年9月18日	390㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 壬生遺跡	都城跡 散布地	平安時代 室町時代	建物、柵、溝、柱 穴、井戸、土坑	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、白色 土器、黒色土器、輸入 陶磁器、土製品、瓦、 金属製品、木製品		1町の東西中心に あたる南北溝を検 出した。		
				土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-5

平安京右京四条二坊四町跡・壬生遺跡

発行日 2013年12月25日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961